

感興深き追懷

## 一 近衛篤麿公を憶ふ

近衛篤麿公は有爲の材を以つて早世されたのは眞に國家の損害である。公の家は攝關の系統を引き、日本に於て此上ない名門であるが、公の人格と材能は首相としても決して差支のない偉器で、何人も早晚それを期待したのに、案外早く世を去られたのは惜むべきである。公の父君忠房たじふ卿は最後の關白で、聰明の人であつたが、此方も早く逝かれて、祖父の君が長壽を保たれた。當時老公を以つて稱したのは即ち此の祖父君のことである。

私の存じてゐる或る歴史家が會つて老公に調して、源平時代の史談に涉つた時、其人は不用意に清盛々々としきりに呼び捨てにするのを、老公聞きとがめ、相國殿キヤウコクノの事かと云はれたので、其人もやうやく氣がつき、成るほど斯様な家柄へ來て粗忽に清盛など、いうたのは宜しくなかつた。清盛も近衛も共に相國の家筋であるからには、相當の敬語を用ゐるが當然であると覺つたといふ。實に斯様な名門になると、歴史上大名のある人々とは、多く血屬上の關係があり、さなくとも同僚とか友人とかの緣故があるから、斯の様な家柄には歴史は決して死んでゐない

のである。

私が初めて篤磨公にお目に懸つたのは公が貴族院議長であつた時で、麴町の邸に居られた頃と思ふ。私を伴うた友人は公とは既に親密の間であつたから、初めより公は打解けて語られ、長坐した爲めに午餐の饗をもうけた。公は大の角觥好きで、回向院と貴族院と掛持に行かれたので、人は兩院掛持というた。公は當に此の戲を好んだばかりでなく、よく此戲に通じ、大體其日々々の番付を見て勝負を判ぜられたが、幾んど失することは無かつた。貴族院の忙がしい時は見物が出來ないために、勝負を其都度電信で取寄せた（當時はまだ電話が無かつた）程の數寄者だから、應接室には槽の小模型が置かれてあつた。公自身も角觥に譲らない偉大な體格で體量二十貫を出で、肉が締つて如何にも立派な相貌であつた。

公と識つてから間もなく一の會が設けられた。それは懇意の同人十數名が月に一回集まつて、酒杯の間に友情を温めようと云ふのであつた。此會員は公と共に獨逸に遊んだ學者政客が多かつたが、私は高田博士と共にそれに列なり、いつも私が幹事をつとめた。それ等の事から公とは益々懇意となり、常に公を友人扱ひするに至つたが、さて時に願みて此人が關白家の出ま

で日本最高の名門であることを思うては、俄かに態度を改めて敬意を表したやうな滑稽もあつた。又或る時は公に向つて、あなたの家は日本の國寶である。御自分では何と御考へか知れんが、攝家と云ふものは、國家の上にも大切な家柄であるから、あなたも、自重されねばならぬなど、も云うた。

公は頗る磊落な人であつたが、併しどこかに儼然たる處があつて、門地相當の威嚴に對しては昵近者でも自然尊敬の念が起つた。公の相貌は秀麗であつたが、凜乎たる氣魄があつて、普通の華族とは大いに趣を異にした。全體公家華族などは何となく薄弱な處が相貌の上に顯はれてゐるものであるが、公に於ては一點弱々しい處がなく、體軀も剛健で、寒中洋服を着けるに、洋袴つばんしたを用ゐるぬ位であつたのに、一朝二豎の冒す所となり、蚤世されたのは全く意外であつた。

日清戦役に廣嶋で臨時議會が開かれた時、吾々も其召集に應じて議席に就いたが、事果て、歸京の途次京都に立寄り、高田半峰居士らと故らに寛げる旅館を選んで泊りこんだ。公爵は貴族相應の旅館に泊つて居らるゝと聞き、定めし禮儀づくめの窮屈に堪へられないであらうと、

使を派して吾々の旅舎へ枉臨を求めた處、直ちに來られて云はるゝには、實は困つて逃げ出さうと考へてゐた處へ使が來て救はれ、誠に難有いと喜ばれた。端なく宴會が開かれ名妓も多く席に來た。同人中の或る通人が、公爵と席を列するは恐れ多い、こゝは關白様の御郷里でもあるからというて、特に上座に緋毛氈などを敷かせて、そこへ公を請じ、校書中最も容色品位のあるものを選び、強ひて公の側らに坐せしめ、之れを御臺所に撥し、一同は慙と末席に坐し、皆低首して、今日は關白殿下並びに御臺所まで御來駕を賜はり、恐悅至極に存じ奉ると、しかつめらしく敬禮をした後は例の如き無禮講となり、公も悅に入つて御祕藏の唄までうなり出された。それは「一つとや」の手毬唄であつたので、如何にも堂上家（うちじやま）にふさはしいというて皆々喝采した。こんな事は公の徳を瀆すといふものもあらうが、公を追懐すると斯る人間味のある逸事を思ひ浮べざるを得ぬ。

## 一一 高麗園雅集

故徳川頼倫侯に辱交の榮を得た、十數年間のことを追懐すると、いろ／＼の事が胸に浮んで

くる。嘗ては九州の果まで旅行を共にし、福岡縣では伴はれて元寇の跡を訪ねたこともあり、自分の郷里越後へ同行の時は、開鑿工事の將に成らんとする大河津おほかづの堀割を同覽したこともある。侯の本邸や別荘に招かれて優待を受け、談笑に時の移るを知らず、毎度深夜に追んだことや、圖書館協會の大會や懇親會で侯を圍んで談笑したことや、思ひ浮べると際限ないほど色々な事があるが、自分の最も愉快に感じて今も忘れられぬのは、侯の大磯の別荘高麗園へ十六七の同人と共にお招きを受けた其の際の事である。

一體侯は多方面に興味をもたれた人であるが、高麗園の別荘は侯の趣味の結晶とも見るべきものである。時は忘れたが十年前に溯る。かねて名園と承つてゐたが、始めて拜見して園の風致と家の結構、園中のあらゆることに侯が加へられた意匠にはつくづく感服した。此の別荘の所在地は高麗山の一端にあつて、山からつゞく森林帯が斜めに官道まで突出してゐる。此の自然の森林の中に道があつて、僅かの勾配で別荘の女關まで通じてゐる。森林は鬱然として白晝も薄暗いほどであるが、流石に掃除が届いてゐて、樹下には名も知れない種々の雜草が叢生してゐる。その草は日々異つてゐるので氣がついたが、これは侯が此の附近三十里界隈の異草二

百種を採集され、それを植付けられたとのことであつた。森林中に石で圍んだ立派な井戸が幾つかあるので、此の雑草を養ふ爲めとうなづかれた。此の雑草はあとでわかつたが、此の森林中にあるばかりでなく、庭にも屋後の山にも幾んど空地を剩さず植ゑてある。其草の原産地を考へ、陽地にあるものは日光をあびる處、陰地にあるものは日の照らぬ處、濕地のものは池沿と、それ／＼草の性に從つて地を相してあるなどは行届いたものだ。

別莊の屋後には山がある。これが高麗山で、大部分御料地であるが、侯は其一角を拜領されたのであつて、少しく登ると、や、平な處に茶店がある。これは片田舎の茶屋に擬したもので、黒木で粗造し、店頭には草鞋や草履が吊され、壁や屋根裏には千社札が貼られ、田舎饅頭を賣る店主は田舎の爺さんにふさはしい粗野な衣服をつけ、どう見ても假裝とは受取れなかつた。店前には旅籠籠が置かれ、どこからどこまで山間の茶屋に出来てゐるのに先づ驚かされた。一椀の遊茶で喉を濡しながら、店の柱に掛つてゐる柱隠しのやうなものに假名で何か刻してあるのを見ると、海拔何尺とあるので一笑を漏らした。この高さは海面から幾らもない、しかるにチャンと尺が計られてあるのが一興であつた。侯は店前に飼養してある猿に戯むれてゐる

られたが、小憩の後、候はこれから山が峻峭だから金剛杖を要すと云はれ、かねて用意の杖を銘々に與へられた。其杖は六角に削つた可なり長尺のもので、六方に烙印が文様のやうに捺されてゐた。其烙印は園内各所の雅名が刻されてゐた。候は例の長身で此の杖をつき、先に立つて案内さるゝのに随つてゆくと、樹木は鬱々として路は屈曲し、路下には谿もあり、何となく深山の趣があるけれども、山は深いのでなく路も峻峭ではなく、深山の峻峭と思はるゝ様につつてある處に候の意匠があるのだ。此の山中に山椒魚の飼養された處があつた。候は此の魚の絶えんとするのを憂へて、天然記念物として保護されてゐるのであつた。これより少しく登ると愈々深山の趣があつて、崖上に一字の小屋があり、その前に臺が置かれてあつた。それに腰を卸してゐると、小屋より粗野な獵師態の男が現はれ出て、甘酒を一同に饗した。小屋の中をのぞきこんで見ると、大きな熊の皮が敷かれて、壁には古風な獵銃がいく挺も吊され、どこまでも獵師の小屋らしく出来てゐたので、また驚かされた。此處から縦横に道があつて追々下るのであるが、いろ／＼の樹木が眼を遮り、道が巧みに作られてゐるので、頗る奥深い感じを與へたが、實は奥深く思はせる様に工夫されてゐるので、數百歩にして平地に入り、やゝ大きな茅

舎に達した。こゝはお庭焼の陶窯のある所で、一同はそこに入り、皆々興に入り悪書拙書を試みたが、侯も一行の請ふに任せて、例の雄健の隸書を多くの雜器に揮毫され、幾十の陶器は窯に入つて看る／＼出来上つた。

さて山を一巡して初めて座敷に導かれた。侯は粗造で見るに足らぬ、併し成るべく無益の裝飾を避け實用を主とすることに多少苦心したと云はれたが、實際は總檜作りで、どこまでも上品に出来てゐて中々手廣いものである。袋戸や床脇の棚などは普通用立たぬものであるが、それにいろ／＼新意匠があつて、皆役立つ様に工夫されてあるのに敬服した。又襖の繪なども、園中に集められた草の圖が文様となつてゐて、各草には小さな色の紙が貼附されてゐる。それには草の學名が書かれてゐるが、その色紙が亦おのづから文様となつてゐるのに感心した。初め此の園に招かれた時同人のいふには、吾々はお座敷の書畫や骨董などを賞翫する能力がないから、感服掛を市嶋君に頼むと云つた辭に、其約に背いて、到る處一行皆々感服して個々に感歎の聲を發し、私から咎められたのも一興であつた。一同食饌に向つた時侯から丁寧な挨拶があつたが、侯の云はるゝのに、昨日諸君に饗するため自身で網を投じ黒鯛を漁して見たが、ど

うも不漁で遺憾ながら数が諸君全部に供する丈ないと云はれた。成るほど銘々の膳には候自漁の魚が焼物となつてゐたので、眞實侯の温い情誼を感じ、それと共に侯が漁撈にも趣味をもつてゐらるゝことを知つた。

此の宴會の席で、一同より侯に獻じたのは一卷の「心經」である。これは吾々同人が二ヶ月ばかり前、目黒の羅漢寺に小集を催した折、いつも腥いものを喰ふ連中が破格に精進するのだから、記念にと銘々一行づゝ敬寫し、それを表装したものであつた。侯は之を喜んで受けられたが、宴會が終ると執事に導かれて離れた一室に入つた。茲には毛氈が敷かれ畫牋が展べてあり、筆硯や繪の具の類がことごとく備はつてゐた。そこへ侯も見えて、諸君の筆蹟は先刻頂戴した「心經」に具つてゐるが、願はくはけふの記念に何か書いてもらひたい。お歸りの汽車時刻迄にはまだ二時間許りあると附け加へられた。さてかうなると、例の遠慮が始まつて互ひに譲つてはてしがないので、自分は和田萬吉君と内議して、折角の思召であるから何か銘々書くべきだが、それは手間が取れるから、君は例の漫畫で十六羅漢に擬し銘々の似顔を書き給へ、その肖像に銘々が署名するのも一興であらうと請求し、自分は先づ惡筆を揮つて牋の上頭に

「高麗園雅集」の五字を横書した。和田君は續いて筆を把り、先づ中央に釋尊に擬して長幹の人物を寫した。それは云ふまでもなく侯を畫したのである。その左右に重なりあつていろく人物が出来た。十六羅漢よりも數が二つほど多かつたのは、一行の數がそれだけあつたからだ。此の羣像を諦視すると流石に筆に靈あり、それく誰れかに似てゐるので、一座興に入つて、われもくと自家の像に名を録したり贊を書いたり、或は認印を捺すものなどもあつて多く時を費さず、一幅記念の書畫が出来たので、侯も破顔して喜ばれたが、此の羅漢像も心經も今になつて見ると、何となく侯に永のお訣れする謙をなしたかの如き思ひがして眞に感慨無量である。

### 三 康有爲と會飲

故大隈侯は漫りに人に許す人で無かつたが、獨り康南海（有爲、字は廣夏）に許す所があつた。其の亡命して日本へ來た時、侯は其の私邸にかくまつて厚く遇された。侯は常に左右に向つて、南海の學識を稱し、其名節を重んずるの高きを賞された。私どもは毎々之れを聽いて南

海を解してゐたけれども、親しく膝を交へたのは可なり後の事である。曾つて南海に早稻田大學の講堂で一場の講演を請うたことがある。其講演は世界の地理に就てゝあつた。こんな講演は兎もすると平板に陥るものなのに、如何にも奇警な觀察の縦横なるに敬服せざるを得なかつた。此の講演の後、學校の當局は南海を紅葉館に迎へて一夕の宴を張つた。其際私も與つたが、南海はこの招宴をひどく喜び、打寛いで種々の談が湧いた。其述懐談の内には下の如きことがあつた。「本席は御懇意の間であるから遠慮なく申すが、日本の文物研究に着眼して、支那は到底日本に學ばざるべからずとなし、日本の書を読み初めたのは、支那人中恐らく自分が第一であらうと思ふ。自分は明治十五年以來日本の書物を読み、遂に之れが翻譯所を設けて流布に努めた。斯様な譯だから今日は支那より多數の留學生が來て居るけれども、自分は其の第一の留學生である。」と云はれたのに、吾々は少からず感動した。明治十五年と云へば、早稻田大學の前身東京専門學校が初めて生れた時で、吾邦の文化もまだ幼稚な時代であつた。然るに先進を以つて誇る支那に居ながら早く文明の學問に志したと云ふは、餘程の識見があるものと云はねばならぬ。

元來南海は沆世罕に見る考證學者で、曾ては「僞經考」を著し、經書の僞作を摘發して學界を驚かし、「改制考」を公けにして、大いに世の經綸家に知られた程の學者であるから、決して悲歌慷慨徒らに氣を負ふのみの人ではない。勿論外國にも遊び、歐米到らぬ處がない位だから、世界の大勢にも通じてゐる。曾つては張之洞に重んぜられ、光緒帝の寵信を得て、何事も直奏を許され、支那の維新を企つる折柄、竟に蹉跌して萬死の裏僅かに免かれて亡命日本の客となつたのである。

南海は學者であると共に經綸家である。若し我國に於て似寄りの人を搜したら、時勢に先立ち早く活眼を開いた點に於て、維新の元勳よりも寧ろ早く勤王の大義を唱へた竹内式部などに比すべきであらうか。併し康の力量は遙かに其上に在ることを思ふと適當の比較でないと思ひ直して、新井白石こそ似寄りが多いとフト思ひつき、南海に杯をす、めながら、此事を言ひ出したのが、座中の談柄ともなつた。白石の時代と明治の初年とは時代は餘りに遠ざかつて比較にならぬが、其の學識の豊なる點に於て、文藻に富める點に於て、早く西洋の事情に通じたる點に於て、創見があつて誤謬の多い舊説を破棄し新見地を開拓したる點に於て、制度に精通して

新機軸を出したる點に於て、將た權門に重任を得たる點に於て、兩々比し來ると似通つた處が甚だ多く、強ち不倫の比較でないとは私の主張であつた。然るに座中の或る支那通が私に耳語していふには、君の比較は穿つてゐるが、唯だ一事の大なる相違がある。それは白石の貧なるに似ず、南海は富籤で大金を贏け、巨萬の富を有してゐると云うた。私は之れに答へて、支那の習癖南海と雖も免かれぬと見えるが、白石は一家の私産は無かつたにせよ、國家の財政經濟を料理する材能があつて幣制を革めたことは著明の事實である。して見れば此點も比較を失するとは言ひ難いと、夜更けるまで、傍若無人に論評したのも一快であつた。

南海は近年之れ程愉快な會に臨んだことはないと云ひ、酒酣なるころ席上絹紙を展べて得意の筆を揮つた。此人は金石書道の學に於ても近世希に觀る人で、陳套の舊說に據らず一家の説を立て、千古の迷霧を開いたものが一にして足らない。私なども、此人の著書の啓沃を受けてゐる所から、斯人の揮毫なら一紙ほしいと思つて、書いてもらつた扁額は、今も我が書室に掲げてある。

## 四 朴氏泳孝と觀梅

朴泳孝氏が金玉均等と共に亡命して日本へ来て三四年程後の事であつたが、偶然朴氏と相識る機會が起つた。二三月頃の寒い時節、私は或る友人と拉へて觀梅の爲め近郊へ出かけた。先づ新橋で汽車に乗ると、同じ車中に朴氏が二三の書生を隨へて乗つてゐるのを認めた。朴氏は當時春秋尙ほ淺く、色白の優形で、秀麗の風貌に品位が備はり、一見名門の貴人であることが領つかれた。主従共に洋服の扮裝で、従者は大瓢を携へてゐた。

車中には互ひに語を交へる機會を得なかつたが、大森で下車し、其附近の梅林を徒歩で訪ね回ると、到る處に大瓢をぶらさけてゐる朴氏一行に出遇つた。此一行も探梅の爲め同じ徑路を辿つてゐるのだから、相前後して同じ處に相會する筈である。斯様な譯からいつしか語を交へることになり、互ひに名刺の交換をやり、大瓢の冷酒を頒ち與へられなどして、爰に初めて朴氏と識つた。四五の梅林を歴訪した最後に手を分ち、歸途には再會を期せず、吾等は氣儘に行動して時を移し、漸やく大森の停車場まで來ると、そこにまた朴氏一行が先着してゐるのに

出會つた。朴氏は到る處大瓢を傾けたと見えて、醉態淋漓の大元氣で、待合室のテーブルの上に横臥してゐる有様は、亡命の事など全く忘れてをるらしく思はれた。日本に身を置くは如何に安全とは云へ、刺客に襲はるゝ危険の無いでもないのに、さても大膽の事よと、吾等は窃かに危んだ。

終に相携へて同じ汽車に乗り込んだが、朴氏は吾等に向つて今日の奇縁を喜び、新橋に着かば日も暮れんが、余等と與に晚餐を共にせずやと云はれた。私共も何れかに一酌をと考へてゐた折柄、一議に及ばずそれに同意して、間もなく新橋に着すると、朴氏等が先きに立ち吾等を或る洋食店へと導いた。こゝは朴氏の常に來る家と見えたが、朴氏は到頭主人となつて、吾等に盛んな饗應をされた。其際は主客共に既に酣醉の境に入つてゐたので、互ひに遠慮會釋なく談論し、果ては政治の論にも互り、朝鮮政治の將來に就ても論議したが、此時はまだ日韓合邦を夢にも想はなかつた時だが、雙方の議論は暗に之れを豫言するものゝ如くであつた。朴氏は當時まだ日本語の操縦が出来なかつたので、すべて韓語で應酬されたが、従者は皆な日本語に熟達してゐて、彼我の談論は遺憾なく通譯され、談論に時の移るを知らず、夜深うして袂

を分つた。私が朴氏と會したのはこれが初めてである。其後は遂に會する機を得ないが、朴氏も今は老境に入つてゐる。知らず、今尙は當年の意氣を存するや否やを。

因に云ふ、氏は判書領議政元陽公の子、哲宗十二年、水原に生る。長じて哲宗の一女を娶り、錦陵尉の榮爵を受く。明治庚戌、日韓併合の後、侯爵を授けらる。

## 五 幼時見た前原と奥平

先頃芝の青松寺に萩の亂に斃れた前原一誠、奥平謙輔一派の追悼會が催された。私は此の二豪に縁故があるから、青松寺の追悼會に臨みたいと思つてゐるが、差支が起つて已むなく缺席した。此の缺席は自分として遺憾とする所であつたので、身代りに奥平の揮毫五幅を、人に託して會場へ持たせてやり展観に供した。

萩の亂も五十年前の昔となり、今日で二豪を知る人は、山川健次郎、江木千之二老の外、幾人も無いであらう。私が二豪を見た頃は十歳にも足らぬ幼少の頃であつた。明治八年に東京へ遊學した頃は私が十六六歳の時で、確か其時前原は萩から出京し、木挽町の或る宿屋に宿泊し

た。此の宿屋の名は忘れたが、萩の人の話に、それは萩の定宿ビヤウヂであると聞いた。餘り立派な宿でも無かつた。何でも五七の附添もあつたやうであつたが、前原に面會したのは六七年目で、そしてこれが最後であつた。其後萩の亂が起つた。此の私の訪問は別に意味のあつた譯ではなく、私の親戚熊倉美雅といふ、當時工部省に出仕してゐた人が私を伴うたのであつた。前原は私を見て「大きくなつたナ」と言つたことが頭に残つてゐる。その後、開成學校で山川健次郎先生から物理學の教を受けてゐたころ、一日同級生と先生の家を訪うた時、先生は茶の代りに大きな茶碗で冷酒を侷められたが、其際フト見ると奥平の揮毫の幅が壁間に掲げてあつたので、先生と奥平とが尠からぬ縁故のあることを感じた。此時は奥平が既に刑死した後であつた。

前原が私の郷國越後に來たのは明治の初年であつた。私の郷里水原みなもとはもと天領で、今は寂寥たる僻邑であるが、茲に多くの富豪が居つたので、明治の初年には茲を政治の中心とした。即ち越後府を置いたのもこゝであり、其後縣を置いたのも亦こゝであつて、前原は即ち越後府の長官として來たのである。水原には舊陣屋もあつたけれども、宿泊には十分の設備も無かつた

ので、私の家に宿泊することになった。邸内には隱宅があつて、それが母屋と離れて可なり廣かつたので、そこを前原を宿す所とした。確か座敷を應接の間に充て、階上が居室で、寢所も爰に設けた。當時府の長官は今の知事などよりはるかに格式が高く、殊に前原は參議格の人であつたから、私の家でも全力を接待に盡し、粗略のないことを期した。當時は政府の顯官を宿すことが、富豪の大切な奉仕であるかに考へられ、之れを以つて光榮とした位である。言ふまでもなく宿泊料を取るではなく、費用萬端皆な賄つたものである。

私は當時頑是ない小兒であつて、時には前原の居室で遊び戯れ、菓子などを貰つて喜び、毎日遊びに行かねば氣がすまぬやうであつた。前原も可愛がつてくれられたが、家父が氣をかねて、さう矢鱈に往つては困ると叱られたこともあつた。幼少であつた私がどう前原を見たかといふと、極めて穩かな沈黙の人で、どうしても恐ろしい人とは思はれなかつた。今になつて考へても、あの人が山縣よりも軍上手の武人であるとは思へない。確か顔面には薄あばたがあり、色白であつた。如何にも鷹揚で物に頓着せず、朝寢坊でそして無性であつた、あの人のエライ處がそこにあつたのだらう。如何にも生眞面目で、怒ることもなく亦笑ふことも無かつ

た。居室にはいろいろの重要な書類が散亂してゐた。それを奇麗に片付けることは御本人の望でも無かつたらしく、三人の小姓のやうな青年が附いてゐるが、此等も居室の掃除をしなかつた位であるから、私の家人などは勿論遠慮して此室に立入らなかつた。唯だ折々遊びに往つたものは、私と私より二歳違ひの弟であつた。此室へ漫りに入ることの出来なかつた理由の一つは、毎月長官が受取つてくる俸給が、奉書紙で包んだまゝ、放り出してあることであつた。此室には床の間がなく、其代りに薄暗らい物置のやうなものがあつた。別に戸も何もなかつたが、重要な物を入れ置くには屈竟の處であつたので、官文書でも俸給でもこゝが放り込み場所となつた。こゝは前原の外、手をつけぬ祕密の所であつた。が、其主人公が無性であつたから、主人公自身も殆んど手を着けたことがないといふ始末で、毎月の俸給が、封も解かれず、累々として他の文書と雑居してゐた。然るに此の封も切らぬ金がいつしか無くなつてゐる譯は、前原をそののちして金を貰ひにくる甲乙たれががあつた。かれ等は前原の性格を十分知り抜いてをり、若しも金の入用があれば私の家が辨ずることをよく承知してゐるので、事を設けて無心をいふと、恬淡な前原は、そこらに包んだ金がある筈、それを持つて往けといふ調子で、みづから手

を下さず、無心をいふものに捜させたので、幾包も胡麻化して持去るといふ始末で、俸給は封のまゝ、他人の手に移り、前原が歸國する時には旅費すら無かつたので、私の家で辨じた筈である。

前原の無頓着であつた爲め私の家で困つた事は、各方面から日々寄せ来る贈品の中には少からず魚類もあつたが、その始末に就て主人は例の無頓着で、小姓輩に何一ト言云ふでもないから、私の家では勝手に始末が出来ず、みすく腐敗せしめたが、後には前原の性格が分つたので、ドシく勝手へ回はして始末をした。當時前原に使はれてゐた、吾が郷人が私の記憶では二人あつた。それは伊藤退藏と遠藤七郎だ。此等は皆な士族でなく、市井の人であつたが、官仕に足る才幹があつた。時々前原に無心を云つた連中は即ち此等である。伊藤退藏は水原の蠟燭製造營業であつたが、晩年岩船郡の郡長をつとめた。前原の小姓格で附添うてゐた三人の青年の一は、此の伊藤退藏の養子で伊藤佛治というた。他の二人の姓名を忘れたが、皆な越後人であつたやうに思ふ。伊藤佛治は私しより年長であつたが、後に東京英語學校で一緒になつた。晩年大審院の判事として相當の地位を占めた。歿してからはや十年餘になる。彼等小姓連

も當時髪を切り下けて、紫の紐で結んでゐた。それが當時の流行であつたのだ。彼等の務は上官の出仕の時御用箱を携へて追隨すること、日々の訪問客を取次ぐ位なものであつた。遠藤七郎に就ては多く語るを要せんが、私の家に前原が、歸國後遠藤に寄せた書簡が一通ある。それに依ると前原には一人の妾があつたことがわかる。「あれも氣の毒だ、どうか俺に代つてよく世話をしてくれ」とある。此の妾はどこに置いたものか、水原在任時代妾宅があつたとも聞かない、私の家には無論妾の來たことは無い、しかし妾のあつたことは争はれない、流石の豪傑も女なしには日が送れなかつたと見える。

前原が私の家に宿した數月間は警衛のために特に門番を置き、又夜番を置いた。裏門のそこには障があつて橋が架してあつた。こゝは家僕の通用する門で、裏門から滅多に前原に面會を求める客の來たことがないのに、ある日のこと、一ト癖ある佩刀の一士人が、袴羽織もつけず「前原をるか」とツカ〜と這入つてきた。これには門番も驚いたが、誰何しても名を云はず、遮らば斬りも捨てん見番であるから、門番も戰慄して隠宅へ案内すると、これが奥平謙輔であつた。門番が後に語つたのによると、テツキリ刺客であると思つたと云うた。如何にも奥平の

相貌は斯く思はせたであらう。彼れの顔面は漆のごとく黒く、兩眼は爛々として光つてゐる。衣服は粗野で袴羽織も着けず、白縮緬の兵児帯を締め、足袋も穿かず古びた下駄を突っかけてゐた。何人が來ても前原に對しては敬語のありたけを用ゐるのに、これは呼葉にして、何を問うても一切答へない。門番が刺客と速斷したのも全く無理は無かつた。今考へて見ても、奥平は案内もなく、よくも裏道をたどつてきたと思はれる。案ずるよりも生むが早いといふごとく、門番から此の椿事の報告される前に、奥平は早や前原の居室に通つて一別以來の挨拶が交換され、間もなく破鐘の如き奥平の大聲が階下に聞こえた。二豪の此會見は何年振とかいふのに、兩人顔を合はせて唯だ一語「オー」と云つた計りで、如何にも簡單なるに驚いたとは傍らにゐる小姓の語る所であつた。奥平は此日より前原と同室の人となつた。奥平は多分佐渡の准判事として赴任前先づ前原を訪ねて來たのであつたらう。私の家は圖らずも爰に萩の二豪を併せ宿す縁故關係を有するに至つた。實は奥平は早く越後に因縁があつた。戊辰の戰爭に越後を平定したのは此人であつた。彼れが新潟の酒樓で紅燈綠酒に親んだのはツイ一年前の事である。併し吾が郷里に來たのはこれが初回であつた。

前原と奥平が私の家に同棲したのは幾日位であつたらうか。私の記憶では餘り長くなかつたやうである。兩人の性格が全然異なつてゐるのに、よくも同室に起臥が出来たと私の父はよくいうた。兩人の異なるのは其の風采のみでなかつた。一方は鷹揚で寡言であるのに、一方は性急で多感である。一方は朝寝坊で日の三竿に上るを知らないのに、一方は東方の白む前に早く目を覺まして破鐘の如き聲で詩を吟じ書を讀むを例とした。一方は喜怒哀樂色にあらはれず、端倪の出来ない所があるのに、一方は慷慨激越、兎もすれば劍を按ずると云ふ風であつた。一方は酒を控へ目に飲んで泥酔の境に至らないのに、一方は斗酒を辭せず、酔倒すれば駒船雷の如くである。いくら相許す朋友であつても、よく起臥を共にし得たものであると怪しまるゝほどに、其の性格が異つてゐた。但だ兩人共に同じき所は頗る生真面目であつた。前原を以つて玄徳に譬へたならば、奥平は張飛であつたらう。奥平はどう見ても武勇の人で、渾身はれ膽、進むを知つて退くを知らぬ人と見えた、機略は恐らく此人の短所であつたらう。しかし學問は深く、詩書共にあの頃の有志家の群を抜き、文章は曾つて草稿を作らず立どころに成つた。

奥平が私の家の客となつて、家人は其の面相で恐れたが、吾等小兒は相變らず其の膝下に遊

び戯れた。コワイをちさんも吾等には優しかつた。奥平は佐渡の准判事を勤め、それを辭してから再び私の家を訪ねて來たことがある。その時は既に前原は去り、私の家も水原から他に移つた頃であつた。今想ひ起すが、岩船郡の辰田といふ村に私の所有地があつて、そこに土地の管理人を置く小さな家があつた。奥平はそこに行きたいとあつて、吾等兄弟も伴はれた。こゝは越後の僻土で奥平を待つ設備がなく、酒は四斗樽を運んで其の鯨飲に委したが、下物の調理には困つた。然るに奥平は一向無頓着の人で、肴はあるに任せて別に望がなく、飯を喫する段になると、必らず總べての肴をしりぞけて、梅干だけを副食物とする人であつた。斯る簡易生活でなければ、此田園には一日も居らるべきでない。案外此の田家が氣に喰つて數日滞在され、毎日吾等を伴うて河原に散策に出かけ、犬などに出會ふと、刀を抜いてどこまでも逐ひかけるといふ意氣で、今日なれば不良の二字の免れ難い型であつた。吾等は此の豪傑には慣れ親んで、其の酔倒を待ちて、其の眞黒の顔に樂書をしたり、玩具を頭髮に結んだりして、サンザン戯れても、眠を裝うてゐるのか一向知らぬ顔で、夢が覺めると面上の樂書などを氣にもかけず、得意の詩を高吟し、興到ると何か書いてやる、墨を磨れと云はれ、吾等は幾度も墨を磨つ

た。私が今藏してゐる四五の幅は皆奥平が越佐在留中の筆ではあるが、十年前東京で手に入れたもので、幼少時代に書いて貰うたものは四散して一紙もない。今想ひ起すが、此の辰田に奥平が酔後揮毫の額が久しく私の郷里の家に掲げてあつた。それは「敵愾」の二字であつたが、奥平は小兒の爲めにもこんな激越の字を選ぶ人であつた。前原の書も皆な散じて幾んど無い、僅かに一幅あるのは「忠孝節義」の四字を縦に大書し、私の幼名雄之助の爲めとある。これが不思議にも母方の村落の一農家にあつて近年手に入り、今はそれを記念に藏してゐるが、前原と奥平は一寸語を選ぶにも各々其性格をあらはしてゐるやうに思はれて、そこに私は興味を感じずる。

奥平が越後に來たのは此時が最後で、前原とは後年東京で遇つたが、奥平とはこれが永訣であつた。前原が越後を引拂ふ時、私を長州へ伴ひたいといふたと聞いたが、それは戯れであつたかも知れんが、父は勿論諾さなかつた。若し伴はれたならば、或は前原と運命を與にして、青松寺の五十年記念祭に祀られた組であつたかも知れん。

## 六 坪内逍遙翁の別荘に宿りて

坪内、高田二博士と熱海に遊んだことが數十回とある、それは書生時代から今に及んでゐる。十數年前に三人が落會つた時に、吾々も老後の靜養所として共同して別荘を設けようではないかと相談したことがあつた。逍遙君は例の談話を弄して、共同別荘と云はずして共同墓地といふたので、それが三人の間の通語となり、連日共同墓地を設ける處を尋ね廻はつたこともあつたが、遂に果さず、逍遙君のみ二度まで別荘を營んだ。最初は海岸近く荒宿あらしどくといふ所に建てたが、後には市街を離れた山寄りの水口村に前のよりは遙かに大きなものを營んだ、今の別荘がそれである。

私は近年熱海へ行く毎に、逍遙君の此別荘に必らず宿ることになつてゐる、如何にも閑雅な處で居心地がよい。殊に君は樓上の書齋を私の起臥の處として充てがはれるが恒例で、茲には筆研圖書茶器寢具まで一切備はり、君一流の意匠を凝した室であるから妙に興味がある。窓に向つて作りつけの机があつて、背後に身體を凭らしむべき柱がある。君が會心の筆を揮ふ處は

即ち此處であるのだ。私も此机を拜借して物を書くこともあるが、窓越しに少しばかりの畑を隔て、隣の農家の茅葺が見える、そして此農家の廐が書齋と相對してゐる。此の廐には戸があつて、それに長方形の穴が穿たれてゐるのは、馬の首を出す處であることは言ふまでもない。ある時筆を停めてフト窓外を望むと丁度馬が首を出してゐて、それと吾等は差向ひになつた。其時私は微笑を禁じ得なかつた。こゝに此家の主人が坐してゐたら、正さに羊と馬とが眞向ひに顔合せをするのである。小羊先生が著作中馬と顔を合はせるのは、多分毎日の事であらうと、其の光景などに想像を馳せて、おもしろく感じたことがある。

逍遙君は文學者に有り勝の不眠症に困められ、眠藥を藉ることが頻々とある。毎朝起きて君と顔を合はせると、先づ私から君に前夜の眠況如何と問ふのが常例であるが、十分に眠れたと聞くことが甚だ稀れた。君はいつもいつてゐる、「何が爽快であると云へば、藥を用ゐず自然に眠を得た其朝ほど愉快なことはいない」と、これを聞いては誠に同情に堪へない。君が海濱の別荘にゐられた時、庭に合歡木の大樹があつて、その枝葉がはびこつて君の書樓を翳し、一種の風致を添へてゐた。此樹の葉は夜分になると悉く裳のごとく垂下し睡狀を呈するので、椽の

名があり又青裳の名もあるのだ。逍遙君が此樹を庭へ取入れたのに格別意味があつたのではないと聞いたが、私は君に向つて戯むれて、草木ですら夜分眠るのに、君は何たる事ぞ、チト此木に見習ひたまへというたこともある。

君は紅葉山人などの遅筆と異つて、一瀉千里の勢で筆を走らせ、其の快速驚くべきものがあるが、併しそれは感興の乗つた時の事で、その感興が湧かねば筆を控へてゐることもある。君は戯れに天來のインスピレーションを狐に憑かれるというてゐる。人が原稿の催促などすると「何うもいかぬ、まだ狐が來ない」と真面目に云はれる。私などは時々君を強制して「狐が來ないでも坪内君で結構だから」というても、君は斷乎として承知しない。

逍遙君とは、ある時間に散策することが日課のやうになつてゐて、熱海の界限、吾々の築痕の印しない處は幾んど無い位である。君は散策中種々文藝にわたる談をされるのが毎々で、それに依り私の耳をどんなに肥してゐるか知れない。梅園の往復に兩人無氣になつて語り合ひ、途上の何物も目に入らなかつたことなどが幾回もある。吾々の散策で人の賞翫に漏れてゐる勝區を捜し出した處もある。今衛戍病院となつてゐる處に山葵の叢生してゐる溪流や、門外

數株の柳のある廢屋や、北齋の三國誌の繪にでもありさうな或る庄屋の牆根と其の門外の竹林などは皆な吾々が賞翫した處で、柳のある家を五柳先生の居と假りに名づけたこともある。併し熱海も鐵道開通其他の爲め追々變遷があつて、吾等が賞翫した處は大抵俗化して、今は一顧の價もなくなつた。

併し今尙ほ依然一個所勝地が存してゐる、それは熱海と伊豆山の中間の往還に在つて何人も通行する所だが、餘り人は注意を拂はぬ。こゝは橋が架してある所で、往來の旅人は景勝に氣もつかず、橋を渡つてゆくが、橋の下は谷が深く落込んで、藥研の如き底に溪流があり、それに沿つて一方に崖が高く聳え、一方には民家の茅屋が軒をならべてゐる。此の民家のある處に立つて橋を見ると、虚空に架したかの如く如何にも高い處にあつて、風趣を感じるのみならず、溪流に臨む民家には澡泉を引いた浴場が戸も閉さずにあつて、それに馬が勝手に這入つてゐる光景は何とも云へぬ野趣がある。さて民家に近い道路には塵埃が委棄に任せて散亂し、丘陵の雜草も亂脈に繁茂して蕪穢を極めてゐるけれども、それが敢て大體の風趣を害するでもなく、却つて自然の風趣を添へてゐる。いつも散策ごとに激稱して、洋畫の畫材として尤もよい

などと噂をする處である。

逍遙君は、いつぞや橋下に足を留めて、風景を賞しながら、脚底に横はる蕪穢のものを踏みながら云はるゝには、沙翁の文章美もよく研究して見ると、決してキチンと片付いてはるぬ、併しそこに却つて長所がある。歐洲近世の大家の文章は、すき間のない程よく整つてゐる。そこに至ると遙かに沙翁以上であるけれども、餘りに格に入り過ぎて却つて妙味がない。沙翁のは丁度此處の取繕はぬ景色や環境のやうなもので、強ひて彫琢を加へず、大體の結構に重きを置かれてゐるので、瑕疵があつてもそれが目に付かず、到底及びがたい雋味があると云はれたが、我輩も全く同感で、文章や風景のみでなく、繪畫、建築、其他の藝術に於ても、君の此評が適中することが多いのである。

吾々が同賞の勝區で逍遙君の作中に取り入れられてあるものもいくらかある。その一は、梅園の奥にある古き祠堂を白晝暗いほどに蔽うてゐる、あの大きな樟は吾等のお名染のものであるが、逍遙君が「役行者」を作するに方り、身自から劇中の人となつて、危険を冒してあの大樹に攀ぢ登り、枝の四方に擴がつてゐる木の股に座を占め、實地の試しをやられたことがあ

る。其際私は熱海に居合はさなかつたが、先頃君の別荘に例のごとく泊つてゐると、玄關の入口のうす暗い處に、一面の寫眞の額が掲げてあるのに氣がつき、よく視ると、それが君の木登りの時の撮影で、天を摩する凄味のある巨樟の枝の間に、白衣白髻の人物が端然と坐してゐるので、これが行者研究の記念寫眞と分つたが、わざ／＼白衣まで着けるとはチト念が入り過ぎると思ひ、それを逍遙君に云ふと、君は笑つて白衣ではない、よく見給へ、羽織を裏返しにして裏地をあらはしたのだと云はれたので一笑した。

逍遙君が藝術に熱心で、その研究に眞劍味のあることは、廣く世間に知れてゐるが、私が長い間の交で驚いたことは、此春君が熱海で重患に罹られた時のことである。其際は一時どうかと氣遣はれ、私も匆皇東京から見舞に出かけたが、家族と醫師の外絶對に入ること許さない、病室から低調でこそあれ、三味線が戶外に漏れ聞こえたので、人は之れを奇とした。實際は三味線ばかりでなく、其病室で踊の稽古が行はれてゐたのである。丁度その頃熱海線が開通するので、豫て君が其爲めにものした、「熱海の榮」といふ一曲を、開通祝賀會に上演する段取になつてゐたのに、君は折あしく其場合病に臥したので、君はそれが氣になつてたまらず、生死

も測られぬ病床に、一二の妓を側近く招き、踊の振を授けたのであつた。幸に藝に堪能である、君の身寄りの土行氏が見舞に來合はせてゐたので、それが君の意を承けて、枕頭に練習を試みたのは、君の勞を省いたに相違ないが、實は命がけの所業であつた。家族は皆ハラ／＼して氣遣つたが、案外熱も多く昂進しなかつたのは何寄りの仕合であつた。

逍遙君には自然の風流趣味があつて、吾等は毎々感服する。君が荒宿の別莊を作つた時には餘りに地積が狭く、庭園に十分花木を取り入れ兼ねたが、幸ひ路を隔て、君の庭の後ろに方り、他人の畑があつて風致のある蜜柑の樹が幾株も植ゑてあり、果實が黄金の色をなして鈴なりに密集してゐるのを、君の家の茶の間から見ても二階から見ても甚だ趣があるので、君はこれを以つて自家の庭の寂しさを補はんとし、毎年持主から果實の全部を買ひ取り、長く樹の上に實を留めて眺めたものであつた。今の別莊は前のに較べると、規模がはるかに大きく、遠望の利く所に最も風致が存してゐるが、一時は君の目前を遮る或障害物が出來、君はそれを除くに一方ならず精神を勞し、果ては少からぬ資を投じて其地を購ひ入れ、漸やく其障礙を取り去ることを得た。さて取去つて見ると、一眸の内に魚見岬の空洞までも透視することが出來て如

何にも眺めはよいが、此の魚見岬近く山状をなしてゐる丘陵に、松の生えてゐるだけでは物足らぬとあつて、その山の所有者に請うて華表を建てることゝなつた。如何にも翠松の間に丹塗りの鳥居が隠見する風致は得も云はぬ趣があつて一層風景を美化した。全體君の別荘は「雙柿舎」の名があるだけに、珍らしい柿の老大樹が一雙並んで庭を飾つてゐる。脱葉の後は殊に其の枝幹の姿態に趣致を覺える。これは君が尤も愛する所のもので、私のために君が嘗つて揮毫した柿の樹の幅には左の和歌が題してある。

わが軒のやせ二王とも立はる百年柿の姿をかしも

## 七 正倉院に團十郎と會す

私は梨園の人と交が幾んど無い。七八年前であつたが、坪内逍遙博士に案内されて寺嶋梅幸を帝國劇場の樂屋に訪うたことがある。舞臺の上で此優を見たことは一再ならずあるけれども、近づいて化粧半ばの此人を見たのは此時が始めてであつた。其時の直覺を云ふと、優男やさなこと思つてゐたのが全く裏切られて、體格が思ひの外に大きく、筋骨も太く荒々しく、手の血管

などは突出してありくと見え、舞臺に見るやさ女は此人かと不審に思ふ位であつたが、併し退いて思ふと、これほどの嵩が無ければ舞臺は泳けぬ譯だ。男優が女形に扮するのは日本に於ては誠に意味あることだと感じた。梅幸は頗る快活の人であるかの如く見受けた。

他に偶然名優と旅先に會したことがある。それを追憶すると多少の趣致を感じざるを得ぬ。

奈良の正倉院は今堅く鎖されて、某々の位爵を有するもの及び其家族と特殊の研究家だけに拜觀を許さるゝ事になつてゐるが、往年まだ餘り面倒な取締の無かつた頃は、幾許の案内料を拂へば直ちに拜觀が出来た。私の拜觀したのは其頃であつた。其折誰か一人私に先立つて這入つてゐる人があつた。其人は仙臺平の袴を穿つた紳士で、薄暗い校倉むらぐらの中を切りに觀回つてゐた。此先生中々いろいろの物に興味があるらしく、熱心に案内者に種々の質問を放ち、中には例の香木蘭奢侈に就ては執拗しつこく質問するので、案内者も幾んど答辯に窮したも道理、此時分は相當の能力ある人が案内したのでは無かつた。私は見兼ねて聊か知つてゐるだけのことをいうて案内者に應援したが、香木の事が濟むと今度は蒔繪の刀室に就ていろいろと質問を始め出したが、勿論案内者には何も答辯が出来なかつた。私は幸ひ嘗て黒川眞頼翁から御物に就てい

いろ聞いてゐる事もあつたので、蒔繪に就ても翁からの受賣をして、これが日本の蒔繪の濫觴であるとお茶を濁し、終には私が案内者で、もあるかの如く、覺束ない説明をしながら一覽終つて共に倉庫を出た。此人は別るゝに臨み私に頗る懇懇に禮を述べて立去つたが、私は後で戸口にある拜觀名簿を調べて見ると「堀越秀」の署名があるので、ハ、ア今のは市川團十郎であつたナと分つた。さう分つて見ると、先刻香木に對する質問が密であつたのも偶然でないと思つた。此人頗る香道樂で、一ヶ月香屋に拂ふ價が何百圓にも上るとも聞いてゐたからである。舞臺の上で此優を見たことは度々であつて、其大きい目玉と朗々たる音吐は藝の外なる大特徴で、今も忘れかねるが、素顔で逢つたのは之れが最初でまた最後であつた。若しあの時早く團十郎であることに氣が付かば、談話の交換に工夫もあつたものと、頗る遺憾に思つた。

## 八 紅葉山人と最後の會食

私は故人尾崎紅葉と別懇であつたので、山人に就ていろいろ語るべきことを有つてゐるが、爰には山人と最後の會食に就て語らう。時は明治三十六年四月七日であつた。山人が不治の大

患に罹つたのを慰藉するの趣意で、高田半峯博士が主人となり、山人を主賓として吾々が博士の小石川の邸に招かれた。此日来會した人々は、山人の外に坪内逍遙、角田竹冷、長田秋禱、梶田半古、武内桂舟の面々で、特に山人の親友を選んで招いたのである。山人は此頃病勢も多少進んで、衰弱の様子を見受けたが、元氣は頗る旺盛で、此人の壽命が數月に迫つてゐるとはどうしても思はれない位であつた。

俳人が二人、畫家が二人來り合はした會であるから、自然席書せきごきが餘興として始まつたが、實は山人の書は絶筆に近いものだと思ふと、黯澀たらざるを得無かつた。山人は先づ筆を揮つて短冊、色紙、絹本、手當り次第、得意の句を録して立どころに十枚程も出來た。其句の中には辭世らしいものもあつて、満座に涙を催はさせた。山人が私の爲めに書いた句は「初冬はつふゆや髭ひげそりたてのをとこぶり」と「たれこめて花に物縫ふ世帯哉」であつたが、初冬の句に梶田が水仙を書き添へた。私は更らに畫帖を出し、桂舟と半古に畫を請めた。半古は燕子花、桂舟は辨慶の勸進帳を書いた。此畫帖にも山人が筆を染めて「目を閉ちて嗚呼われ花につかれたり」の一句を書いてくれたが、山人が私の爲めに書いたのはこれが最後である。

斯る文嬉に時が移つて、各々膳についたが、山人は警戒を守つて葡萄酒と鶏卵の外に少量の汁と米飯の外、口にしなかつた。食通の山人も好物の鰻や天麩羅に手を出すことが出来ず、寂し氣に喫飯するのを見ては氣の毒の感に打たれて、胸一杯となつた。此日の來會者は下戸が多く、桂舟、竹冷兩氏の如きは、菓子で胸をわらくしたのを汁粉でなほすといふ弱武者である。酒なれば人後に落ちぬ私も、此頃は禁酒時代であつた。實は告別の懇親會のやうなこんな會には酒が飲めても座が白け勝ちであるのに、酒を飲むものが少なかつた爲めに一層座は白けた。但だ懇意同志の間であるから、罪のない冗談は湧くが如く起つた。紅葉は鰻ものと鰻が食ひたいと啣ち、私はよく調理した惣菜が旨いと主張し、半峰氏は油揚が旨いと氣焔を吐き、桂舟氏は笥子を主張し、竹冷氏は鱈鱈たらたらの調理法を云々するなど、食物談で持切つたのは、まさか今日の主賓が食道樂で病を醸したその因縁からでもあるまいにと、私は窃かに笑つたが、私と紅葉山人と食事を與にしたのはこれが最後であつた。

## 九 寺崎廣業の騰龍軒

寺崎廣業が「東洋繪畫雜誌」の下々繪を書いてゐるころ、偶然日本橋邊の或る宿屋に暫時同宿した關係で懇意となり、長く交際をつゞけた。筆を載せて私の郷里新潟へ來たこともあり、其の鶯溪に住してゐた頃はしばしば訪うたり訪はれたりした。潤達で愉快な性格の人であつた。晩年大家となつてから、小石川の臺町に堂々たる邸宅を構へ、豪華な生活を營んだが、鶯溪に居つた頃はまだ不如意で、床の間には何であつたか、金石の拓本が一幅掲げてあつて、それがいつも掛け替へられずにあるので、私が畫家の幅としてはチト堅過ぎるでないかといふと、廣業のいふには、實は恰好のものが無い。床飾りとある以上、相當のもので無ければならぬが、自分の私淑する雪舟などの幅は、價高くして及びもつかぬ。凡庸畫家の作では自分の見識が許さない。已むなく拓本を掲げてゐるが、實は何かと掛け替へたいと、平生苦悶してゐるといふた。

さて其後廣業の此床の間に、一本の明竹が壁を穿つて生え出したと、新聞紙に發表された。丁度其頃廣業は富岡永洗と連れ立つて、私の家へ遊びに來たので、談は自然此事に及んだ。私の言ふには、君の床の間の工合も庭の様子も、一通り知つて居るが、全體竹が生え出したとい

ふのは、どうした譯だ。竹が床の間から生え出したなどといふと、君の家の様子を知らないものは、さもなくばばら家のごとき感をなすであらう。お氣の毒に、君の座敷はそんなにひどくもないのに……。廣業曰く、なアに壁の隙間から出たのだ。新聞に出たものだから大層評判になつた。何にしても目出度いからと言ふので、見ず知らずの人から、物を贈つて祝つて呉れたり、歌などを寄せたり、中々の騒ぎだと云ふ。私は親竹は君の庭の中にあるのかと問ふと、實は隣の竹が垣根越しに俺の處へ遣つて來たのだと答へた。私はそれぢや後日所有權の問題が起るかも知れんナ。それは兎も角もとして、君は嘗つて畫家の床の間には見識上減多な幅をかける譯に行かぬと言うてゐるが、天然の竹は君の師であり先生である。これこそ畫家の床飾に最もふさはしいものでないか。私は君が佳い幅を獲たことを祝さざるを得ぬと云ふと、廣業は成る程と云ひ、永洗は笑つた。

此時廣業は越後の良寛の事を想ひ出したらしく、昔し同じやうな話があつたぢやないかといふから、私は、あるよ、あれは僧良寛だ。草庵の縁から穿つて出た竹が、追々生長して遂に天井に届いた時、良寛は天井を切り破つて、竹の自由の發達を助けたと云ふが、其の人格をよく

あらはしてゐる。君も宜しく其の擧に倣ふがよからうと語り、日を経て、實地を見る爲め廣業を訪うて見ると、如何にも床の一隅から一竿の竹が出てゐた。なか／＼姿勢がよいから、葉が出たら一段よからうと賞しながら、室内を見回すと、新装の額が掲げてあるのに氣がついた。それには「騰龍軒」の三字が書かれてあつた。即ち某親王が新聞の記事をみそなはし、特に賜はつたのだと廣業は説明した。廣業に「騰龍軒」の別號のあるのは此故である。

## 一〇 中井敬所翁を懷ふ

反故は多く屑籠に葬られ、還魂紙料となる果敢ない運命のものであるが、瓦礫の中にも珠玉を發見することがある、反故も一概に棄つべきでない。名家の反故には、兎もすると面白いものにぶつつかる、別して緣故ある故人の反故には興味を感じる。ツイ此頃手に入つた中井敬所翁の雜錄一冊には、自筆の記事の外に、いろ／＼のものが張り込んであつて、云はゞ反故のやうなものであるが、翁に交つたことのある自分には、此反故に對して少からず興を感じた。

此雜錄は六七十枚の半紙を綴つたもので、翁の見聞が例の見ごとな字で書かれてゐる。多く

は金石に關する考證などであつて、各所から寄せた印影や、金石の拓本なども貼りつけてあるが、中に大磯邊へ遊んだ紀行もあつて、同行した狩野氏の筆に係る、高麗山、鳴立澤邊の風景圖も添つてゐる。その風景の中に、翁外二人の人物も入れてある。中根香亭より寄せられた詩が詩箋の儘に貼つてあつたり、郷純造、杉聽雨、今泉雄作氏等の書翰も收めてある。他から鑑定を頼まれた印に註を施した草稿らしいものもある。また中には細心に印の鈕まで摸したのものあり、翁の晩年に私が箱書を頼んだことのある、汪啓淑の「秋室印剩」(印譜五冊)の内の五六の印を丁寧摸し、各冊の印數を録し、自分の爲めに作られた題識や私の姓名までも委しく録してあるのには少からず興を感じたと同時に、翁が印書を苟くもしない細心に敬服した。

尙ほ此の冊子を翻して見ておもしろく感じたものが二つある。その一つは、寛政十二年江戸で出版した兩面一枚摺の狂歌便覽とでも云ふやうなものが收めてある。それを見ると、欄外に翁の註があつて翁の印が捺してある。注意して見ると、狂歌を多く列した中に「氷」の題で詠じた武人窓面成の狂歌こそ、翁の祖父に當る人の作であることが欄外の註で知れた。其註には「武人窓面成、通稱森江徳右衛門兼垂、江戸人」とあり、又「就尙左堂俊滿學狂歌、以文化

十四年六月朔日歿、行年四十八」とある。其の狂歌は「立田川とづる紅葉のもやう物、氷も春のしたくをやする」とあつて、圖らずも此の摺りもので翁の先代に狂歌の名人のあることを知つた。翁の名が兼之かねゆきで、其の祖父の名にも兼かねの字があることに氣がつくと、何となく一脈の通ずるもの、あることを思はしめた。

今一つは岩田正義（芝宇田川町十七）といふ人より翁に寄せた書翰で、其の封筒を抜いて見ると、中から肴料の包紙が出てきた。

肴	價
金	千 疋
中井敬所	

裏	金 千 疋 之 目 録、在
	中 五 圓 紙 幣 一 葉、
	先 生 老 矣、直 以 此
	幣 購 説 文 一 部、爲
記 念	寒 山 老 衲

此の包の譯が手紙に書いてある。岩田が何かの譯で翁より贈られ、辭退も成り兼ね、懐中して

歸路山田寒山（印人）を久々で訪問すると、寒山不相變赤貧洗ふが如くで、話次彼れの云ふには、近日説文會せつもんくわいの催しがある。自分も出席したいが、それにつき文求堂に新渡本の説文を購はんと思へど、囊中無一物である。願はくは右代金二圓五十錢拜借したいと云ふので、翁より贈られた包を其儘出して與へ、辭し去るに臨み、折角翁の厚意だから、包紙だけは持歸らんと、中を抜いて見れば、千疋（二圓五十錢）と思ひの外、二千疋（五圓）入つてあるに始めて氣がついたとある。即ち裏に寒山が先生老いたりとある所以で、翁は二千疋と書くべきを誤つたのである。此の行違は翁並に寒山の面目を躍如たらしむるものがあつて一笑を禁じ得ない。

僅かの反故の中にも妙な掘出しがある、名家の反故はウツカリ出来ないものだ。私は此の反故をひねくり廻はしながら、翁に就ていろいろのことを憶ひ起した。私が翁に初めて會つた頃は既に七十の坂を越えてあつたやうに思ふ。たしか亡友横井時冬氏の紹介で、早稻田大學の校印の刻を頼んだ。其時翁は義子新家孝正氏の座敷に自分を延き、いろいろ文庫の印を摸したものを出して示された。金澤文庫の印ばかり六七種も自ら丁寧に摸して置かれた。それには火前火後の區別のあることなど説き聞かされたが、摸寫が精の極に達してゐるので一嘆を發せざる

を得無かつた。此の印の刻が成ると、自ら携へて私の居を訪はれたのは案外であつた。自分は其時態々老體を煩はし恐縮だと挨拶すると、翁の云はるゝのに、雅印と違つて校印は大切な物であるから、萬一間違があつてはと思ひ自ら持參したと云はれたので、其道理あるに服した。翁は鶴のごとく瘦せ、銀のごとき白髪を戴いた、仙骨ある人であつた。坐談が上手で多方面の趣味家であつた。私の爲めにも二三顆刻されたが、それが最後の刻である、即ち絶刻である。翁の刀痕は鮮かなもので、如何にも若々として水際が立つてゐる。嘗て家祖の印を携へて高美蓉の作か否かを確める爲め訪うた時は病床に居られたが、それでも病床に私を延いて直ぐに鑑定された。これが不起の病であつて間もなく易寶された。翁は平生元氣で、此大患の辱上にあつても平生嗜む所の冷ひやのヤツコ豆腐を食されたと門人から聞いた。又八秩近くなつても妾があつたやうである。

不忍池しのはず心の寺を會場として説文會が開かれたとき、翁に就て思ひ出づる一事がある。此時説文家は皆珍藏の圖書を持出して陳列したが、翁の列品の中に其の珍藏の狩谷椽齋自寫本「古京遺文」が出てゐた。此の寫本の中に頼山陽が椽齋の家に寄宿した際助筆した處があると聞いてゐた

から、よくよく繰つて見ると、成る程山陽の寫した處が三葉ほどあつた。それから他の陳列を  
追々巡覽して大槻文彦氏の陳列を見ると、こゝにも同じ形の「古京遺文」の寫本があつて、正し  
く齋齋の手寫である。不思議に思つて口書を見ると、字が半分缺けてゐるので、試みに翁のと  
合はして見るとピッタリ合つた。自分は驚き且つ喜び、座中の翁に、あなたの「古京遺文」の  
半分はどこにあるか御承知かと聞くと、知らないと言はるゝから、自分は兩方の本を持來つて  
翁の目前に口書を合せて見せたときには翁も驚喜し、大槻君とは惡意でありながら、ツイ今ま  
で一半のそこにあることを知らなかつたと云はれた。大槻氏も同様で、果ては互ひに吾れに讓  
れ讓らぬの争が生じた。自分は其時戯れて、此の二つを合はした月下氷人は私であるから、争  
の決するまでは私が雙方の本を預るといつたことがあつた。翁は大槻氏より年長でありながら  
最後に何と云はるゝかと思つたら、ナンデモ早く死んだものが讓ることにするより外はない  
と、暗に自分が長く生存するもの、如く云はれたが、翁の反故を見るにつけいろ／＼のことを  
思ひ起す。

## 一一 印の結婚

漢詩で名を博した、亡友坂口五峯氏（仁二郎）は私と印癖を同じうした。それに就て印の結婚とでも云ひ得る珍談がある。自分は曾つて鶏血石の印材を三十餘顆一括して得たことがある。鶏血石は敢て珍らしくはないが、兎に角三十數顆纏つてあるのが氣に喰つて愛藏した。

これより先き、郷里の友人三浦桐陰といふが、吾等兩人に印癖のあることを知り、其の愛藏に係る、高芙蓉の刻印二顆を割愛して五峯と私に一顆つづ與へた。私に贈つたのは「滄浪」の二字が刻してあり、五峯の貰ひ受けたのは「鶴鳴于九臯」と刻されてあつて、共に名作である。五峯は窃かに私の貰ひ受けたものをも併せて自家の印笥に收めんとの野心を抱き、折に觸れて私に割愛をほのめかしたが、私は拒んで應じなかつた。ある時酒後五峯が頻りに割愛を請ふから、私の云ふには、折角老友の贈つたものを趣意もなく君に贈ることは相成らぬ、若し趣意が立てば強ち割愛せぬでもないといふと、五峯は熱心に、如何なる趣意をも立てるから是非にといふので、其時私が鶏血石の事を言ひ出し、あれに對して君が一詩を私に寄せらるなら、そ

れに對して印を割愛しようといふと、五峯は言下に「よろしい」と快諾するので、私は更らに、「併し、それには條件がある。詩の結構は飽くまで私の注文通りでなければならぬ」と前提して「頼山陽には、嗜血歌がある。私も二十數年前郷里に嗜血したことがあつて、幾何かの血を失つた。然るにこれ丈多量の鶏血を得たのは、曩に失つた血を償つて餘りあるといふことを必ず詩中に収めて貰ひたい」といふと、君は「作るには骨が折れるが兎に角やつて見るとせう、併し短句では駄目だから長篇で作らう」といふことで、其數日後、初稿をもつて來て示すのを見ると、それは非常な大作で大いに意に滿ちたから、謝して之を收めようとする、「いやこれはまだいかぬ、これから大久保湘南にも相談した上、槐南にも一通り見て貰ふ」と、例によつて凝りに凝る君の性質を現はした挨拶であつた。

其後一週間ばかりで定稿が出来た、見ると成程初稿よりも一段とよくなつた。其時君は、此作の成つたのを記念する爲めに是非一會を催したいから、某日枕橋の八百松に來いといふ。興あることに考へて當日誰れが來るかと思ふと君の答へに、これは君の手に在る印を吾輩の家に貰ひ受ける一種の婚禮ともいふべきものだから、是非媒妁人を要する。そこで詩の方面の立會

人は湘南で、印の方は濱村藏六ときめたとの話で、頗る趣向が振つてゐる。

さて其日定刻に會場へ行くと、右の兩人も來り會した。自分は「滄浪」の印を持參して交換の式を舉げたのであるが、先づ立會人湘南が吟聲を得意とした人だけあつて、朗々として五峯の長篇「鷄血石歌」を三誦すると其聲が水に響いて餘音長く、一座に詩味を漲らせた。湘南はこの詩に手を入れた關係深い人ではあるが、一切草稿につかずして長い詩を暗誦したのには敬服した。ところで此日自分には別に何等の案もなかつたので、マア演説でもやらうかと、やをら起つて一席辯じた。其趣旨は、

これは自分の愛兒であるが、今回坂口家から切に懇望されて縁づける事になつた。實は割愛については頗る躊躇したのであるが、熟考へると、既に姉妹たる一つが坂口家にあるのだから、此兒も共に坂口家に養はれることになれば、恐らく其身の幸福であらう。斯く考へて坂口家に贈るのであるが、唯だ貧寒なる自分は嫁入支度の餘裕がないので、着のみ着の儘といふよりも、此通り赤裸々であるのは恥入る。

と述べて箱も篋もない印を振り翳しつ、挨拶を終つた。斯うして五峯も立會の兩氏も盛んに盃

を舉げて痛飲したのであるが、此事あつて數日後、今度は私が一會やるから某日某刻赤坂の三河屋まで來會を乞ふと案内した。但し諸氏の外に更に一人を加へたい。それは寺崎廣業氏であるといふと、一同皆知り合ひだから異存がない。そこでいよく雅會を開くと、其席上で坂口君は「鷄血石歌」の長篇を一幅の掛物とすべく揮毫したほかに、卷物一卷にも筆を染めたが、掛物の方は對幅とする爲め立會人諸君が別に合作の筆を執るといふ譯で、それには廣業氏が丹青の跡を残し、藏六氏が又これに一作を添へた。湘南の一詩はもとより此際無かる可からざるものであつたが、生憎湘南はその前日から痘瘡に罹り、當日出席し得なかつたのみならず、その一日後に病歿して、才人の風貌は長へに見る時もなくなつてしまつた。此前後の雅筵は、當時文壇の一部に佳話として傳へられた。五峯の「鷄血石歌」は左の如くである。

春城先生有印癖。龍文鳳篆苦搜索。玩物自比襄陽顛。博古將奪松雪席。少時論事忤當路。文字買禍鬪籀。時艱高目三十年。一腔熱血空鬱積。久之遂致長吉嘔。赤鬢迸地真可惜。天上將成白玉樓。人間難覓丹砂液。有人來賣雞血紅。昌化所產其鈕百。方圓大小各態殊。或戴花冠。或赤幘。綠字鮮疑繡頸回。朱文勁見金距磔。就中一塊如峻山。山皴隱見絡紅脈。

先生獲<sub>レ</sub>此疾霍然、摩挲日夕手不<sub>レ</sub>釋。紅霞滿<sub>レ</sub>室、光熊熊<sub>、</sub>春城居赤城下。顔其室曰紅霞山房。邀<sub>レ</sub>吾誇示連城壁。自謂  
曩時嘔<sub>ニ</sub>出三斗血。滲入<sub>ニ</sub>石膚<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>許赤<sub>ニ</sub>。寸心耿耿某在<sub>レ</sub>斯。歷<sub>ニ</sub>遭虜劫<sub>ニ</sub>長不<sub>レ</sub>易。吾謂先生莫<sub>ニ</sub>  
乃丈人頑。彫<sub>レ</sub>肝斲<sub>レ</sub>肺亦何益。胸中磊塊今有無。聞<sub>レ</sub>雞起舞憶<sub>ニ</sub>曩昔<sub>ニ</sub>。不<sub>レ</sub>願磨厓刻<sub>ニ</sub>姓名<sub>ニ</sub>。唯願  
先生壽猶<sub>レ</sub>石。

## 一一一 白河の提灯行列

前年松平樂翁公に贈位の御沙汰があつた時、白河では公の爲め紀念祭を催すにつき、大隈侯  
に一場の演説を請うた。侯は諾して臨まる、筈であつたが、生憎病に罹られ、代理として高田  
博士、吉田博士（東伍）竝に私が臨むことになつた。老侯の演説を代理するには一人では足ら  
ぬ、三人の力を併せたら不完全ながら代理が出来ようと云ふのであつた。出發に臨んで、侯の  
病床に就き、樂翁公に關して御腹案があらば承りたいといふと、侯の言はるゝには、曾て北野  
の天満宮に參詣した時、寶物を見たが、其中に文晁の畫した菅公縁起の繪巻物があつた。この  
繪巻物は樂翁が特に書かせて、納められたことが巻末に記されてあつたので、自分は一種の感

に打たれた。菅公は忠碩の人であつたのに讒せられて貶謫され、樂翁も治蹟大いに擧つたのに地方巡廻中に貶せられた、兩者の境遇に似寄りの處がある。樂翁が此の繪卷物を特に菅廟に納めたのは、恐らく菅公に同情を寄せ、暗に自分が同じ境遇にあることをほのめかしたものであらうと云はれた。之れを聽いて侯の腹案の一端も知れたので、吾々は白河に赴いたが、河野廣中氏が案内格で同行され、途中備さに福嶋事件の真相を聞くことが出来て、大いに興味を覺えた。

白河の講演會に臨んで、吉田博士は白河の史蹟を談じ、私は樂翁公が、多く有益の圖書を公刊された事蹟を擧げ、公の爲め記念圖書館を作るとあらば、先づ公に依つて刊行されたあらゆる圖書を備付けるを以つて其館の特色とすべしと説き、高田博士は大隈侯の腹案を敷衍し、且つ大隈侯自身ならば避けて言はれないであらうと思ふことを代理だけに敷衍した。それは何かと云ふと、大隈侯は人も知るごとく菅公の苗裔で、侯自身も其祖先のごとく強大なる閥の壓迫を受け、しばしく失脚した人である。侯が菅公に同情のあるのは、恰かも同じ境遇に陥つた樂翁公が同情を寄せたと同日の談であるから、樂翁公に對しての大隈侯も亦同情の切なるものがある筈だ。大隈侯が北野神社で樂翁の納めた繪卷を見て感懷を禁じ得なかつたのも、畢竟大隈

候自身が菅公とも樂翁とも同じ境遇であることが與つてゐるに相違ないと説いたので、聽衆に大なる感動を與へた。

私が白河で感興を覺えたのは此の講演會であつたが、尙ほ他に一事の漏らす可からざるものがある。それは盛んなる提灯行列の行はれた事だ。提灯行列は西洋のカンテラ行列に倣つて吾の大學が會つてやつてから、追々行はれ出したが、此行列の祖先が白河にある事を始めて知つた。樂翁公は早く白河町民に此行列を教へ、其遺風が今尙ほ嚴然と存してゐる。此行列は有事の時に備へる一種の武的訓練であることは言ふ迄もない。私が此行列を見て感服したのは、隊伍の如何にも整然たる事にあつた。鐘が鳴ると全町民が咄嗟總動員を爲すのであるが、永い間訓練してゐるから、各町の順列がよく定まつてゐて、少しも混雜することなく、甲町の動員に乙町が次ぎ乙町に丙町が次ぐといふ順序で、一町一團には必らず町名を記した大なる提灯が高く捧げられ、伍長らしいものが中形の提灯を携へ、一般のものは銘々小形の提灯を携へて、各團肅々と歩を運び、公園に向つて行進する。其の狀蜿蜒幾十町に涉り、宛がら枚を啣んでゐるかの如く、絶えて喧聲の聲なく、足並の亂れざる行進は、流石に訓練あるものと感服を禁じ

得なかつた。吾等は公園のある亭に酒食の饗を受けつゝ、此行列を迎へたが、此公園には南湖といふ大なる池水があつて、それが園に風致を添へてゐるが、此行列は例として此池を一周するのである。熾々天を焦す無数の燈火は池水に映じて、えも云はぬ快感を與へたが、特に行列が全池を包圍した時は湖の全面に火光漲り、眞に壯觀を極めて、今尙ほ忘れ難い趣がある。

### 一三 足利町の追懷

足利町の有志者に招かれ大隈侯が同地へ行かれた時、私も隨行した。其際は支那公使も一行の内にあつた。足利は支那と織物の貿易關係があるから、侯は特に公使に同行を勧められた譯であつた。

足利では侯一行を待つに盛んな設備をやり、公園内に幔幕を張つて、そこに多衆を會し、侯と支那公使の演説があつた。その際休憩所に充てられた處は、公園内の白石山房で、これは此地に名高い畫家田崎草雲の舊居である。私は初めて草雲の遺像を拜し、且つ草雲の閱歴や逸事を聽き、おもしろく感じた。其逸話の内に、草雲がまだ名を成さない伏櫪時代に、御殿奉公を

した或る婦人を納れて妻としたが、此の婦人が貞淑でよく良人に仕へ、嘗つて草雲が盛茂暉の山水をほしがり、之れを購はんとして資を得なかつた時に、婦人は髪飾りや衣類までも賣つて其の資に充てたといふ美談もあつた。此の來歴のある盛茂暉の幅は、今足利町の豪家の手に歸してゐるので、此日の宴會席に充てられた銀行の樓上に特に掲げてあるのを一覽し、益々興をそつた。

足利には、貴重なる古書を藏してゐる有名な「足利學校」があるので、私は一二度特に此地に遊んで、古書籍の取調べをしたこともあり、その校内に行はれた釋典せきてんを見たこともある。又鏤はん阿寺あじを訪うて其什物を見たこともあり、此地に興味をもつてゐるものであるが、田崎草雲の遺址を見て亦一つの趣味を加へたのである。

此日私の宿つた家は大きな料理屋であつた。夜に入り寢に就かんとする時、土地の有志が私の室に來り、階下に小宴を催してゐるから、其席に一寸來いと請はれた。私は一應辭したが、是非にと需められ、衣服など着換へるに及ばないからと云はるゝので、寢卷のまゝ、其席へ出て見ると、三十人許りの町の有志が居並んでゐた。私は今更寢卷の儘で出たことを悔いたが、退

いて取繕ふことも出来ず、導かる、まゝに上席に着いた。隣席には笹川臨風君がゐる、何か足利に就て所感を陳べよと云はる、ので、これも辭しかねて、出鱈目を云うた。その出鱈目の席上演説が、やがて足利町の町會の議に附され、私の説が實行さるゝに至つたのは、實に意外であつた。

私の説といふは、足利には有名な足利學校の遺蹟があつて、古くから釋典が行はれてゐる。これは孔子を祀る支那の祭典であるけれども、古式を亂さず久しく嚴肅に行はれてゐることは足利の誇りの一つに數へてもよろしい。お祭りは云ふまでもなく土俗風習で、來歴の古いほどそこに趣味がある。釋典は近年お茶の水の聖堂に復興され、年々行つてゐるけれども、此足利のよりも整備してゐない。久しい間古式を崩さず續けてゐるのは足利學校の遺蹟が存してゐるからでもあるが、祭典中珍とすべきものである。足利には外にお祭りもあるであらうが、全國に知られてゐるのは此釋典である。然るに此の釋典は學校の奥まりたる狭い處に行はれ、それに參加する人も極めて少數である爲めに、足利の人達は見たくも見ることが出来ぬといふ仕末であるのは遺憾と云はざるを得ぬ。これ程名高く且つ趣味の深いお祭りを、何故少數者の爲す

に任かして、町民は視ず聽かずで濟ましてゐるのであらうか。私は足利町の爲めに圖るに、此の古風な趣味ある祭りを足利學校の祭典とせず、これを全町の町祭とし、其の執行さるゝ十二月二十五日には全町皆業を休んで、一日を娛樂に費したらどうかと思ふ。それをするには、丁度此度大隈侯や支那の大賓を迎へるため野外に歓迎場を設けたやうに、釋典の式を衆庶に見せるやうにして貰ひたい。大きな鍋で牛肉を煮て、之れを大牢に擬し、式に參列するものに酒を飲ませるなども一つの趣向であらう。尙ほ當日講演會をひらき、一般に名家の講演を聞かせるなどもよからう。斯の如きは此の町の繁榮を圖る一策であると思ふと。

私のいうたことは凡そこんなことであつて、咄嗟の思ひつきで責塞ぎに云うたことであつた。勿論それが實行されようとは夢にも期さなかつたのだが、其年の十二月の二十二日頃であつたか、足利町から特使が來て云ふには、先般貴君の仰せられた通り、町會で釋典を町祭とすることに決したから、お説に従ひ當日講演會を開くにつき、是非お出でを願いたいとあつたので、私は事の意外なるに驚いたが、自説の行はれたのだから愉快を感じて、歳晚匆忙の折柄ではあつたけれども吉田東伍博士を作うて臨席することを約した。さて當日出かけて見ると、町

はづれの民家に國旗が樹つてゐるのが先づ目につき、追々町に入ると連簷皆國旗を掲げてゐるのを見ては、痛快の感に打たれた。依つて坐ろに大隈侯に随伴當時の事を追憶し、侯の演説はあれほど雄大であつたが、其の雄大の爲めに實行が出来ず、自分の寢巻演説が却つて實行されたといふも妙だと、眞に感慨無量であつた。

當日の講演會は満場立錫の地なきほどの大入りであつた。其際に於ける私の講説は足利町の繁榮を圖る二三の私案を述べたので、其の要旨は、

(一) 幸ひに鄙説が採用され、釋典が町祭となつたのを満足に思ふが、節季師走に近い十二月二十五日にお祭り騒ぎをすることは、或は時期を得ないと思ふ人もあるかも知れぬ。此町には春期に織姫のお祭りがあると聞くが、釋典をばそれと同時に進むもよからう。釋典には必ずしも十二月二十五日に行はねばならぬと、支那の舊規にある譯でもない。

(二) 足利學校は儼然遺址を存し、建築物も残つて居り、上杉家傳來の貴重書も保存されてゐるが、實を云へば骨董同様に取扱はれてゐるのである。此學校を永久に保存するの道は骨董としてゝなく、活かして働かせて、是非町民の爲めに無くてならぬものになければ、百

世の保存は覺束ない。之れを活かすの法は、中學校程度の學校を興し、舊造營物をこれと併せて足利學校と稱し、子弟を教育するの處としたい。これが永久に保存する法である。

(三) 今一つの冀望は、足利町の智識開發の爲め適當の圖書館を設けたいといふことである。

足利學校に藏してある圖書は、概ね國寶に値する貴重のものに相違ないけれども、實はこれも骨董に齊しいもので、働きをなすものではない。民智の開發を圖るには、時代に應ずる圖書が必要である。殊に足利町は染織を以つて名産とする所であるから、それ等の營業者の爲めに何密りも大切なものは、染織に關する參考書であることは申すまでもない。若し十分の働きある圖書館を作るとならば、當業者の必要とする多くの圖書を備へて、其視利を圖ることが肝要である。此地の染織家は今の處皆銘々必要の標本などを備へてゐるが、若し圖書館にそれ等のものまで備はること、なれば、銘々が高い價を拂つて備へるに及ばないことになるのである。此の町の如き特殊の産物のある所には右のごとき特殊の圖書館が必要である。當業者に關く可からざるものとなれば、圖書館は永久に存續するに相違ない。併し以上の如き冀望は將來のことに屬するかも知れぬ、差當つては普通の圖書館

でも結構である。足利學校の貴重圖書も、町衆に重寶がらる、必要の圖書と共に保存さるるでなければ、永遠に保存されようとは思はれぬ。私が圖書館の設置を望む所以である。釋典を町祭としたキツカケに斯様な冀望を陳べた。そして足利町の如き力ある土地に斯様な冀望を有つたのは決して出来ない相談とは思はなかつたが、其後は打絶えて足利町に赴かないから、一向様子が知れない。釋典が引きつゞき町祭となつてゐるかどうか、それすら消息を知らぬ。

#### 一四 酒豪二人の追憶

中國筋で著名の素封家は野崎武吉郎氏である。初期の議會に多額納稅議員に擧げられたのは此人で、私の同姓も越後から同じ多額議員に擧げられ、同僚である關係から特に別懇であつた。同姓からしばしば野崎氏の事を聞いてゐるが、面會する機會が無く、幾年か経過した。或る年吾が大學の用を帶び備中に旅した時、田邊碧堂氏の紹介で初めて此人に會した。

氏の家は岡山縣の倉敷を距る三里許りの海濱で、味野といふ所である。訪ねて見ると、如何

さま堂々たる家構で、主人の在否を糺すと別荘の方に居ると云ふことで、留守であつたけれども、兎に角通れとあるから客間へ通ると、家人の挨拶振りや接待振りが極めて物馴れて懇切であるので、先づ以つて主人の風格が推量された。

しばらくすると別荘から電話がかゝつて来て彼方へ来いとあるので、別荘へ出かけた。此の別荘は同じ市中に在つて本宅より僅か三四町しか隔つてゐぬ。茲に初めて主人と會見を遂げたが、主人は其頃六十からまりの年輩で、體格のよい風采の溫雅な人であつた。此人の客を遇することが懇切で禮儀正しく、私が別荘に着した時は、時間を見計らつて、門前に佇立して恭しく迎へられた。

主人は切りに一泊を勧めらるゝので、其深切にほだされ、まだ日も高く且つ旅宿も遠くないのに、其の勧めに應ずることになつた。此別荘は近年の經營に係るものらしく、極めて新しく見受けた。庭は海濱に相應する結構で、翠松白沙の間に程よく巖石を點綴し、五六の白鶴が遊んでゐた。やがて晚餐の時刻となり主人に案内されたのは百疊敷の大廣間で、床には森寛齋の海上の鶴の大幅が掲げられ、私が其正面に控ゑられ、主人外一家眷族の五六は横手に陪席し

た。何分にも廣い室での饗應、私は俄かに大名にでもなつたやうな心地がした。

俄大名の氣分はわるく無かつたが、茲に當惑の事が起つた。元來此家の主人は非常の酒客で、眷族も皆豪酒であると兼ねて聞いてゐた。然るに私自身は随分酒量があつたのだが、病の爲めに酒と絶縁して十年にも及んでゐる。今豪酒家の客となり、宛がら大賓を待つかの如き饗應を受けながら、果して酒を辭し得べきや否やと苦悶した。曾つて私自身にも折角人を招いて其客が酒を飲まぬと云ふ場合には不快のものであつた。今其情を推して考へると、私が酒を辭したら主人は恐らく不興であらう。さればと云うて十年折角守つた禁を破るのは余に取つては重大事である。漫りに主人の意を迎合して譯もなく杯を舉ぐべきでない。宜しく心事を明白に告白して而る後應ずべきであると、意を決して主人に實を告げ、折角の御款對なるが故に十年の禁酒を解くというた時、主人は感激して慇懃に禮を云はれた。斯くして私は十年目にもとの酒客に復したのである。此夜此別荘に宿し翌朝辭し去るに臨み、私が齎らした用件は忽ちに辨じた。酒客の同感が俗事に及んだのであらう。當夜主人歡喜の狀が今猶ほ髣髴目前にあるが、此人は既に鬼籍に入つてゐる。

こゝに亦酒客に就ての追憶が他に一件ある。岩崎氏の三菱時代に東京支店長を勤め、後吉佐移民會社長として知られた、吉川泰次郎氏は土佐出身で、豪放磊落の人であつた。私は曾つて本野盛亨翁の紹介で此人を訪ねたことがある。其頃は吉川の全盛時代であつた。

氏の宅は向島に在つた。なか／＼數寄を極めた壯麗のもので、庭は千坪もあらんと思はる、廣さで、見渡す限り平然たる芝生で、目を遮るものは牆塀を隠す若干の樹木のみで、一風變つた趣向の庭であつた。こゝを訪うた時は秋の初め頃で、まだ暑い時であつたから、肥滿した主人は殘暑に堪へざるもの、如く、膚も露はに頗る寛濶の態度であつたが、例の土佐辯を操縦して如何にも客を外らさぬ處があつた。要談が濟み辭し去らんとすると、主人は押し止め、折角來られたのだから、緩々話してお出でなさいと云はるゝので、私も辭し兼ねて其氣になると、主人は此處は暑いから、庭に出ようと云はれ、急に執事に命じて涼床をいくつか庭に運ばせ、それを組合はせて毛氈を敷き、私をそこへ導かれた。涼床の上には緞子の座蒲團があり、臺の四方には十ばかりの榻が排列されてあつた。間もなく杯盤が運ばれ、食膳酒器さま／＼のものが列ねられたが、皆燦爛たる蒔繪づくめであつた。着かざつた侍女は周圍の榻に踞して、酒を

注ぐもあれば、團扇もてあふぐもあり、物の持運びを擔任するもあつて、約十人許りがゾロリ取巻いたところは如何にも堂々たるもので、其大名的態度は慥かに此主人が仕へた岩崎氏の盛時を僣ばしむるものがあつた。

主人はなか／＼の豪酒で且つ飲み且つ談じた。兎角土佐の土音が勝つてゐて話を往々解し兼ねたが、すべて話が大きい處に興を惹いた。主人は人に酒を勸めるにも亦巧みで、平生其薫陶を受けてゐる侍女等は勉強して酒を注ぐので、私も漸やく酔郷に入つた。午後の四時頃でもあつたか、一天俄かに掻き曇り、ポツ／＼雨が落ちて來たが、主人は一向頓着なく平氣で飲み且つ談じてゐた。雨は用捨なく勢を増し、其の點滴が膳部の中を浸すので、主人初めて氣が付いたかのごとく、急に雨傘を持來らせ、侍女をして主客の背後からさしかさしめ、主人は尙ほ自若として飲み且つ談じてゐるので、私もそれに倣つて平然たらざるを得なかつたが、考へて見ると、傘を翳して雨中人と對酌することは臍の緒切つて初めての事で、一種の興味を感じた。

主人は空を仰いで、此雨は直ぐに晴れようと大平樂をいうてゐたが、その期待は裏切られ

て、終に覆盆の豪雨が襲ひ來たつた。流石の主人もこれには閉口し、私を促して座敷へと馳せ上つた。私はこれを機會に辭し去らんとしたが、主人は容易に許さず、更らに飲直さうとあつて、杯膳を座敷に移し、更らに飲み更らに談ずること前の如くで、いつ果つべくもないから、私は屢々辭しかつたが、其都度引きとめられて既に夜に入つた。酒家の常として酔が回はると種々の下物が欲しくなる、主人は頻りに呼鈴を鳴らしてそれこれと取寄せせる。曰く鹽辛、曰く唐墨、曰く甲地の産物、曰く乙縣の何と、持ち來るもの十種に垂んとし、主人益々興に入つて辭し去るを許さないので自分もホト／＼閉口し、漸く透を窺つて逃歸つた事がある。自分は多くの酒豪を知つてゐるが、其中最も雄なるものとしては此人を推さざるを得ない。氏は如何にも愉快な酒豪であつた。

## 一五 盲啞學校に失明の馬琴を講ず

私が往年早稻田大學の圖書館で、曲亭馬琴の遺書展覽會を開いた時、第一に名刺を通じて私を尋ねて來た人が、盲啞學校の校長小西信八氏であつた。小西氏は私と郷國を同じうする人だ

が、私の遇つたのは此時が初めである。私は小西氏の來觀に就て何となく一種の感に打たれた。云ふまでもなく馬琴は晩年失明したが、それでも尙ほ改々として八犬傳の大作に努め、終に大成を告げた。小西氏が特に開場劈頭に來觀したのは、恐らく盲目なる馬琴に同情を寄せてのことであらう。流石に盲人教育の衝に當つてゐる人だけあると感じ、話の序に此事を言ひ出すと、小西氏は微笑を浮べ、さう云ふ意味のない譯でもないが、併し貴君がさう云ふことに直ぐお氣の付くのも、盲人に對し同情があるからであらうと信ずる。今日の御陳列は盲人教育の爲め至極結構の事であると、鸚鵡返しの挨拶に接した。小西氏は重ねて云はるゝには、甚だ唐突のお願ではあるが、どうか私の學校へ來て盲生の爲め一場の講話が願ひたいと請求された。私は之れに對し、盲人教育に就ては全く門外漢であるから、盲生に對する講話の材料を持合はさぬと辭退に掛ると、イヤ馬琴の話が願ひたいのだと云はるゝので、辭しかねて承諾し、四五日經て盲啞學校へ臨んだ。

小西校長は喜んで私を迎へ、講話を爲すに先立ち、各教室へ案内された。校長は室毎に盲生に對し私の姓名や來校の譯まで懇切に告げられ、啞生に對しては、黑板に私の名刺の通りの文

字を書いて、啞生をして其字の傍らへ假名をつけよと命ぜられ、一々教室を參觀せしめられたが、不幸なる盲啞兩生に對し氣の毒な情を禁じ得無かつた。中にも啞生の多くは名家の子で、風貌も揚り品位も備はり、立派な少年であるのに、大切な官能を闕く不幸を目睹しては一滴の涙無きを得なかつた。

私の講演は茲に委しく陳べる要もないが、主として馬琴が失明後、亡兒の寡婦に筆録せしむるに苦心したことを言ひ、文字に嫻はざる婦人に字を教へ假名遣ひを教へながら筆記を續けた苦心は一通りでなく、剛愎な馬琴も幾んど氣根が盡き、年若い女性を斯くまで苦めるでもあるまいと、幾回か著作を斷念しようとしたことなどを語り、世には一字千金といふ形容詞もあるが、馬琴の失明後の文のごときは正に一字千金に値するといつて、あらかじめ數へて行つた字數の披露をもやつたが、今は其數字を忘れたけれども非常の大數で、一字を千金と打算すると、其頃の日本の國債の總額に當ることだけは今も記憶してゐる。私の講演は傍ら稿檢校の事にも及び、盲人は大切な官能を闕く代はりに他の官能が非凡に働くから、偉いものが盲人より出る。諸子も盲人であるからと云つて失望するに及ばぬ。發憤すれば馬琴たり塙たる事が出來

るといふやうな事を一時間許りに陳べた。

私の講演が了ると、小西校長は私に返禮とあつて、或る盲生に點字の八犬傳の或部分二三枚を朗讀せしめられた。これには私も一驚を喫した。八犬傳のごとき大部のものが、點字に出来るとは思はなかつた。校長に聞けば、失明の某法學士を慰める爲め、その細君の心がけて斯やうなものが出来、幾んど八分通りは既に成つて居ると云はれたので、更らに驚いたが、此失明學士の夫妻も私の講話の席に居られたので語も交へたが、不幸にして此盲目學士は其後歿したと聞いた。

## 一六 横濱に於ける同窓會

青年時代の追懐ほど感興のあるものは無い。別して窓を同じうして學んだものが、年を経て舊雨を語るほどおもしろいことは無い。吾等一ツ橋の帝大に學んだものは、今でも時寄り牛肉會を開いてゐるが、いつも書生時代の舊態丸出しで、互ひに貴様呼はりを作り、傍人をして驚かしめることもあるが、實はそのうぶな處に興味があるのだ。近年同窓が追々歿して賑かな會

合もないが、明治三十一年頃に横濱に開いたのと、尋で東京に開いたのは可なり趣向もあつて面白かつた。幸に其際の記事が存してゐるから爰に其一端を語らう。露骨に何もかもさらげ出せば一層興味もあるのだが、矢鱈に天機を漏すと迷惑する人もあるから、多少の取捨は已むを得ない。尙ほ貢進生時代のことは私共の前に當り、其狀況は知れないが、いづぞや杉浦天台道士からの間書があるから、それを終りに附することにする。

横濱に催された同窓會は千歳樓を會場として、横濱在住の友人が萬般の斡旋をした。其時の案内狀は左の如きものであつた。

(前略) 生等諸兄と袂を帝都に分ちてより各自其の業務に従ひ、萍痕絮跡、暫らく合うて久しく離る。歲月人を待たず、皆驅つて初老の列に入る。曾て兄等と共に一橋敷にあるや、意氣軒昂、絹布白足袋を賤しみ敝袴紺足袋を貰ひ、入りては食堂の戸を破つて賄方を叱叱し、出で、は高屐砂塵を蹴つて大道を闊歩し、燒芋を啖ひ煎豆を嚙り、尙ほ且つ飽かず、子路も途を譲り顔淵も面を反す。而も囊中得意の秋には、天麩糰屋に大氣焰を吐き地久庵に大政を議す。醉來眼中英雄なし。壯跡今に至つて二十餘年。頭を回らせば半ば縹緲の間に

落つ。然れども春花秋月、追ひて梁山泊の當時を思へば豪傑豈に萬斛の感なしとせんや。生等曩きに同窓に檄して會合を促すも遂に行はれず、日來情念轉た切也。願はくは來る二月四日午後四時、横濱市住吉町千歲樓に會し、綠酒紅燈の舊雨を話し、傍ら當港の近況を視、以て條約の實施明日に來るも、まごつかざるの論資に供するあらば幸甚。御返事待ちますよ。

此の檄文は在學時代のことをよくあらはしてゐるので評判がよかつた。さて案内を發した面は左の四十一人であつたが、差支が多くて僅かに○を附した十四人が集まつた。尤も神奈川縣の井上書記官と松山參事官の二氏は、同時代ではないが開會地に居る故を以つて來會した。

○高 田 早 苗 井 原 師 義 ○市 島 謙 吉  
大 尾 權 平 關 直 彦 田 中 館 愛 橘  
○藤 澤 利 喜 太 郎 土 方 寧 ○山 田 喜 之 助  
三 崎 龜 之 助 三 宅 雄 二 郎 天 野 爲 之  
○坪 内 雄 藏 ○石 渡 敏 一 秋 山 源 藏

石川	千代松	江木	衷	山口	俊太郎
○藤田	四郎	都筑	馨六	堀	達
菅谷	正樹	伊藤	悌治	小林	堅好
日下部	辨次郎	植村	俊平	朝倉	外茂
樋山	資之	梅若	誠太郎	○香坂	駒太郎
馬場	憲次	○田原	榮	有賀	長雄
○赤井	雄	○鈴木	充美	○三浦	力太郎
奥田	義人	○山縣	量次	○高橋	捨六
原嘉道	吉岡	哲太郎			

來會者のうちで、最も人目を惹いたのは鈴木充美氏であつた。此人は辯護士で、同窓時代に  
 は秃充はびくちうと諷名された。氏は在學時代の服裝そのまゝといふ扮装で、木綿の黒紋つきに同じ羽織  
 を着し、白綿小倉の袴を着け、大きなステッキを横へてやつて來た。誰れが見ても、當世の所  
 謂壯士、豫戒令を食ひさうな容子であつた。氏の語るを聞けば、此の會に來る前に一外國人に

用があつて訪問した。其時服装に氣がついたけれども如何ともしがたく、名刺を出して通されはしたが、外人はヒドク驚いて、私に不審を抱いたので、それを言ひ解く爲めに手間が取れたと一笑した。

席の定まる前に、思ひ／＼に暮を圍むやら既往を語るやらで、なか／＼賑はつたが、幹事の趣向として、茶菓子には態と煎豆や豌豆などを大鉢に盛つて座中に置き、鈴木氏の寄附だとなつて、焼芋を大皿に堆かく盛つたのが、座の中央に置かれたのも愛嬌であつた。

時刻は進んで早や夜に入つた。甲乙の大食家の催促あるに任せ、クジ引を以つて座席が定まると、三浦力太郎氏がやをら立ち上つて開會の挨拶をした。此人は今は故人となつたが、新潟學校時代から私の同窓で、大學を出てから、米國領事館に入り十數年を勤續し、缺く可からざる人となり、髭も外國人らしく生え茂り、言語さへ外國人の日本語らしく聞えるのは、平生外人に親炙してゐるからであらう。彼れは滑稽の句調を以て、開會の辭は舊大學濱尾總長の假聲を以てせんと、當時我々の仲間の笑柄となつてゐた濱尾翁の言葉其儘、ハア Please eat in this room; there is nothing. (どうぞ召しあがれ、何もありません)とやつてのけたので、一座絶倒し

た。

開會の劈頭、誰やらが銘々順番に當時の失錯談を陳ぶべしとあつて、赤井、石渡、鈴木、香坂などの面々はそれに應じて交々談じた中に、赤井氏は、坪内氏と余と三人が、上野邊に飲んで、深更宿する處がなく、徹夜銀座街頭を散歩したことを語つた。私も其關係者として、赤井氏を補足し、銀座のハテ迄往復しても夜が明けないので終に九段に上り、例の夜燈のある芝生に憩ふと其儘眠に落ち、翌朝通行人の足音に目を覺して驚き起き上つた時は、既に日がカンカンとさしてゐて多くの人が通行してゐたのには面目無かつたと説き、鈴木氏は大森から東京へ歸る時、汽車の切符を買はんとするに、一厘の不足を告げたのに窮し、何とかして鐵道の役人を胡魔化さうとして胡魔化す能はず、終に一喝せられたことを語り、香坂氏は高田氏と共に王子の扇屋に飲んで、勘定の場合に十錢の不足を生じ、ジャン拳で樓主に言譯をいふ役目を定めた處、高田氏が其の選に當り、手を振はしながら言譯をした光景を説き、歸途二人乗りの車に乗り、東京の某處に至り車代を借りる底意で、揚々として歸る途中、運悪く車の輪が外れて、途中より代金を拂はざるを得ざる絶體絶命の場合に迫り、已むなく兩人力を合せ繩などを拾ひ來り、一時

の繕ひをして、無理々々東京まで車を引かせた失錯談をなし、何れも大に興に入つた。

時に樓婢が一通の電報を持つて來たので、差出人を見ると、廣島秦巖<sup>いはは</sup>方地久庵おゑい、松月梅、高田小すみとある。地久庵は書生時代によく行つたそば屋の名、松月は天ぶら屋の名、おゑい、お梅は何れも其處の下女だ。小すみは書生仲間の評判となつてゐた下谷の妓である。こんないたづらを書いて來た電報の主は、まがふ可くもあらぬ山田一郎氏であらうと判ぜられ、披いて見れば、

ハタトセノユメアラタナリケサノユキヘン

とある。之れに返事をやることゝなつて、山田真南氏、田原柳城氏などいふ連中が、いろいろ工夫を凝らしてゐるが、如何に返事を出したか、私は與からなかつた。それから寫眞師が來て當日の光景を撮影し、それが終つて、銘々隠し藝を出す可しと幹事から宣告があつた。

先づ之れに應じて、座の中央にあらはれたのは赤井氏である。彼れは學窓時代に落語家の眞似上手を以つて持て囃されたものだ。私も英語學校にゐたころ、彼れが寢臺を高座として語るのを二三度聞いたことがある。久しく消息を絶つてゐたから當夜の來會者中では最も珍らしい

人であつた。彼れは洋服の上に羽織を着し、近年はいたく落語の伎倆が退歩したと斷つて説き出す口吻、懷中から手拭を取り出す調子、靜かに襟吞を持ち上げる態度、たしかに前座位は語られる伎倆があると見受けられた。彼れは當夕の會を種として、可笑しき落し話をして滿場の笑を博した。次に原銀行の支配人であつた山縣氏が、肥大孃少の身を以つてシヤチホコ立ちをなし、高橋捨六氏はトンボ返りをなし、又箸の上に盃を載せて輪廻しをなし、鈴木氏は手拭を頭に載せて閻魔大王に擬し、續いて仁王の面貌に擬したが、閻魔大王は最も妙だと喝采を博した。次いで山縣氏は、柄にもない二上りを巧みに歌ひ、山田氏は怪しい義太夫二三句を語り出したので、それが大阪の代表かとまぜ返された。

坪内氏は衆に強ひられて、テヅマの沿革を説き、余に新發明のテヅマありと云うて、帽子三つを机上に並べ、皿にありし生薑を衆の目前に噛み盡し、唯今食ひ盡した此の生薑を諸君の指圖に任せ、何れの帽子の下にても置く可しとて、帽子を指定せしめ、急に其帽子を戴いて、御覽なさい、此の帽子の下に在りますと立ち上つて、指にて腹の邊をさして一笑を博し、赤井氏も負けじとて、机上に盃洗二つを並べ、一つの盃洗の水を他にうつし、ハンケチを以て双方を

覆ひ、只今一方に移した水を更らに他へ移して御覽に入れますと、扇を以つて煽りまはり、さて最早や一方に移つてしまひましたれど、之れ丈けでは興味薄し、も一つおまけに更らに元へ戻しますと再び煽り立て、又もや大喝采。斯くのごとくにして、此の會は閉ぢられた。

## 一七 東京に於ける同窓會

明治三十二年四月、自分が幹事となつて、一橋時代の帝大の同窓會を催ほしたことがあつた。何しろ其の昔同じ鍋に飯を食つた連中が集まるといふのであるから、平凡な、眞面目な遣り方では面白くない。何か大に風の變つた趣向を考へたいといふので、坪内逍遙氏や故尾崎紅葉氏などを參謀として色々の工夫を凝らし、つとめて滑稽な會合を催ほすことにした。そこで先づ大體の趣向をいふと、會員への案内状は狂詩を以てすること、會場を東台梅川樓とするのと、洋行者の送別、新博士の祝賀を兼ねること、餘興としては伊井蓉峯をして書生氣質（坪内逍遙作）を演ぜしめること、それから來賓を呼ぶこと等であつた。その來賓といふのも、もとより四角張つた高位高官の人では面白くない。一同の書生時代に、質屋の役目をつとめて呉れ

た人、世話になつた唐物屋などを當日の賓客とすることに定めた。

いよく大體のことが決定して、四月三日の神武天皇祭當日、會員一同に對して、同窓會開會の檄を發した。それは左の狂詩である。

## 一橋同窓會第二會檄

鼻壓<sub>ニ</sub>天狗<sub>一</sub>氣吞<sub>レ</sub>牛。天下才俊推<sub>ニ</sub>吾儁。名轟一橋同窓會。罵<sub>ニ</sub>飛俗物<sub>一</sub>取<sub>ニ</sub>手球。第一會開<sub>ニ</sub>橫濱表。千歲樓上醉且謳。書生氣質昔物語。今爲<sub>ニ</sub>歷々第一流。評<sub>レ</sub>花品<sub>レ</sub>月窟癡藥談。舊語<sub>レ</sub>新爲<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>憂。第二會催於<sub>レ</sub>此起。大聚<sub>ニ</sub>同志<sub>一</sub>大欲<sub>レ</sub>遊。遊處何<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>花上野。諸君御存<sub>レ</sub>梅川樓。來八日午後三時、會費三圓帳場投。恰是春風好時節。花笑鳥歌忍之丘。憶昔伊達高足駄。微醉吟<sub>レ</sub>詩花下浮。又憶墨田月夜櫻。花吹<sub>レ</sub>雪處泛<sub>ニ</sub>小舟。振<sub>ニ</sub>返<sub>レ</sub>往時<sub>一</sub>渾如夢。一別十年空指<sub>レ</sub>僕。知是諸君定同感。當日是非御出頭。尙又同窓關係人。甲乙丙丁誘<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>求。情切心逸如<sub>ニ</sub>矢竹<sub>一</sub>。時日切迫難<sub>レ</sub>踟躕。何卒來會有無<sub>レ</sub>文。屹度即刻請<sub>ニ</sub>返郵<sub>一</sub>。

此の檄に對しいろいろ返事が來たが、其の中殊に振つたものが數通ある。先づ日下部氏（辨次郎）の次韻の詩は左の如くである。

次韻

空齋居士

遠州樓上會喰<sup>レ</sup>牛。思出當年一鍋儔。寄宿舍中噉<sup>ニ</sup>燒芋。體操揚裡弄<sup>ニ</sup>野球<sup>（ベースボール）</sup>。或驕<sup>ニ</sup>大福<sup>（福）</sup>圍<sup>レ</sup>爐笑。  
又倒<sup>ニ</sup>老蘭<sup>（蘭）</sup>拍<sup>レ</sup>手謳。舉動稍雖<sup>レ</sup>似<sup>ニ</sup>粗暴。我黨昔日書生流。蓬々散髮毫無<sup>レ</sup>厭。寥々懷中亦不<sup>レ</sup>  
憂。聞說先日橫濱表。久々同窓愉快遊。今度又催第二會。會場上野梅川樓。案内通知擬<sup>ニ</sup>趣向<sup>（趣向）</sup>。  
狂詩活版郵函投。幹事署<sup>レ</sup>名何者抑。藤澤利喜覺<sup>ニ</sup>三丘。正是櫻花好時節。貓兒杓子大被<sup>レ</sup>浮。年  
年此頃於<sup>ニ</sup>墨上。競漕最盛各科舟。是等小生無<sup>ニ</sup>頓着。只待<sup>ニ</sup>會日<sup>（會日）</sup>頻指儂。同感諸員定不<sup>レ</sup>少。確  
信大勢御出頭。寄<sup>レ</sup>語當回幹事殿。澤山馳走致<sup>ニ</sup>請求。萬一會費告<sup>ニ</sup>不足。君方自腹勿<sup>ニ</sup>踟躕。酬  
餘漫記<sup>ニ</sup>出鱈目。從<sup>レ</sup>命卽刻爲<sup>ニ</sup>返郵<sup>（返郵）</sup>。

註。遠州樓神田橋外牛店。老蘭酒名。

日下部氏は理學博士で、巖谷小波氏の兄である。其の文才は殆んど天稟に屬するといつてもよい。此の詩はよく我々書生時代の風景を描寫して原作よりもうまいが、之れが推敲の上の作でなくて、咄嗟の間に成つたといふに至つて、特に其の才氣に敬服するのである。山田莫南氏（喜之助）の返事は、

妙詞拜讀一何粹。召集傲文感服至。余輩只今雖病中。勉鞭尻馬出頭致。

士子笑(面氏(金四郎)の返書は、

八日には生憎ようが御座候

残念ながらさんじ申さず

開會の八日と時刻の三時とを利かせたものである。巨智部忠承氏(理學博士)の返事は、

一橋同窓會。最是結構催。此會員鼻隆、參圓卑於埃。雖欲致相陪。生憎別會開。役人之悲哀。不往惡鹽梅。乍残念至極。欠席于今回。決非唱大根。文圭安在哉。

大根とは書生時代に假病のことを言つたものである。當時大學に秀島文圭といふ醫者がゐて、假病をつかつたものをよく看破したのであつた。森鷗外氏からは左の如き詰責狀が來た。

「灌頂樓主人」とは鷗外氏の變號である。

讀傲寄一橋同窓會幹事次韻

蕎麥汁粉乃至牛。健啖會誇無匹儔。又將杯酒澆何物。磊塊一名肝積球。由來兩刃稱難使。吾獨併得附鼻謳。平生唯厭嗟來食。况敢膝行拜於流。心事如件與誰語。世無友達

最堪<sub>レ</sub>憂。聞説一橋同窓會。可<sub>レ</sub>謂近頃無類遊。當時創立第一會。大開橫濱千歲樓。風評入<sub>レ</sub>耳浦  
山敷。久欲<sub>ニ</sub>以投<sub>レ</sub>名狀投。忽見幹事懇飛<sub>レ</sub>檄。第二會開<sub>ニ</sub>忍之丘。千載一時之謂。吾雖<sub>ニ</sub>不精<sub>一</sub>  
豈不<sub>レ</sub>浮。好機會兮不<sub>レ</sub>可失。食則食<sub>レ</sub>牛吞吞<sub>レ</sub>舟。不<sub>レ</sub>知當日果何日。仔細讀來指空樓。檄是三  
日之所<sub>レ</sub>作。云來八日可<sub>ニ</sub>出頭。既曰<sub>ニ</sub>八日<sub>一</sub>即明日。吾有<sub>ニ</sub>先約<sub>一</sub>巨<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>求。消印認得七日發。底  
事這般爲<sub>ニ</sub>踴躍<sub>一</sub>。擬<sub>レ</sub>責幹事不都合。直揮<sub>ニ</sub>秃筆<sub>一</sub>艸<sub>ニ</sub>返郵<sub>一</sub>。

四月七日夕

灌頂樓主人

之れは鷗外氏の處へ、おかれて手紙を出したので、幹事の不都合を責め來つたものである。  
無論咄嗟の間の作であるが達者なものである。

愈々開會の當日となつたが、出席者の顔觸れは、

日下部	辨次郎	山田	喜之助	市嶋	謙吉
天野	爲之	高田	早苗	坪内	雄藏
尾崎	徳太郎	岡倉	覺三	木場	貞長
高橋	捨六	田原	榮山	縣量	次

原	嘉	道	樋	山	資	之	石	渡	敏	一
香	坂	駒	太	近	藤	仙	秋	山	源	藏
中	嶋	謙	造	田	中	館	斯	波	淳	六
三	宅	雄	二	岡	崎	正	李	家	隆	介
杉	山	四	五	堀	田	連	舟	越	勇	夫
井	原	師	義	朝	倉	外	三	浦	力	太
有	賀	長	文	今	井	鐵	佐	々	木	忠
中	原	貞	三	藤	澤	利	高	橋	一	知
和	田	垣	謙	三						

などの面々で、外に來賓として、江草芥太郎、塚谷喜平、桑端九兵衛の三人を招いた。この江草芥太郎は今は故人となつたが、書肆として名のある有斐閣主人で、昔は徹々たるものであつたが、義氣に富んだ人で、大學生に氣受けがよかつた。いつも金に困ると一冊二冊の洋本を持つて行き、五十錢、一圓の金を借りたものだ。大學生の爲め大切な金融機關をつとめたのは

此人であつた。それから塚谷、桑端は、兩人とも西洋小間物商で、主として大學生の用を辨じたものだが、怪しからん陰陽の禪名で呼んだ爲めに、其の姓などは今記憶してゐるものは少ない。併し當時は日々物を此二店に購うた。そして掛で買うたから終には二十圓三十圓の借りを生じて、それを返さぬものもあつた。兎に角一同にはお名染の商人である。尙此外地久庵といふ蕎麥屋も、學生の兵站部をつとめてくれた關係上、これも招かうとしたが、代がかはつてゐるので見合せた。

扱て幹事の挨拶に會が開かれて、先づ餘興として伊井蓉峰の壯士芝居が始まつた。戯題は坪内逍遙氏の當世書生氣質下宿屋の段であつた。此の小説は人も知る如く、我々同窓を中に取り入れたもので、坪内氏の處女作である。それを蓉峰が、紅葉と親密の關係のある處から、一つ演つて見ようとの好意に出でたものであつたのだ。其の揚割りと登場役者とは左の如くで、ここに蓉峰から紅葉に送つた書面をかゞける。

揚割(大道具は至極簡にいたし  
幕の明間も長くは無之候)

## 第一 下宿部屋

一七 東京に於ける同窓會

是れは塾部屋ともつかず寄宿舎ともつかず、只何となく集まりし體。

登場

任那（本多小市郎）（性格は異なり候へども守山も加味す）

繼原（福島清）（倉瀬桐山を代表す）

須川（伊井蓉峰） 小町田（三浦滿壽次郎）

桐山（藤澤淺次郎） 宮賀弟（若月新樹）

下宿屋矢場女仕出し（大勢）

おとよ（鶴岡福之助）

第二 淡路町矢場

第三 寄宿舎門外

第四 門外（是は桐山に須川打たれる處）

第五 門内

第六 草津溫泉泉座敷

第七 風呂場前

第八 元の座敷

と筒様にいたし申候、原作破壊の大罪を犯し申候、可成丈は性格及び原書のせりふにより申候へ共筋は前後いたし候、御ゆるし下され度候、實にむづかしきものに候。

人員は

俳優

(伊井、柳澤、藤嶋、本多、三浦、鶴岡、  
藤井、藤森、吉澤、若月、山崎、村井)

扱て斯ういふ場割、役割で、いよく書生氣質の芝居が初まつたが、出席者の中には、此の劇中の人物に當るものが少からずある。今は天機暫く洩さずとして置かうが、こんな縁故のある芝居のことだから、開演と共に、皆が舞臺に向つて、固唾を呑んで眺めて居る。就中劇中の一人物たる三宅雪嶺氏などは、偶然か、あらぬか、最も舞臺近く寄つて熱心に見て居た。

併し蓉峰一座の書生氣質は、大體に於て失敗たるを免れなかつた。元來蓉峰などは、昔の大學生といふものを知らずに、今日の下落した書生の状態をのみ見てゐるのと、蓉峰自身は獨逸仕込の書生で、英語教育を受けたことなく、従つて一寸喋舌る西洋語も矢張り獨逸語であるの

で、甚だウツリがわるい。それに俳優に大學生といふ品位がない。それでゐて、今日の帝大生に比し四段も五段も氣韻の高い昔の大學生を寫さうとするのだから、凡べての遣りぶりが妙を得ず、且つ大體に於て下劣を免れなかつたのは甚だ遺憾であつたけれども、又無理のない點もあるのである。で、觀客は何れも半ばにして倦厭を來し、「よい加減にしてよして呉れ」とか、「お互ひが舞臺に上つた方が却つて成功する」とかいふ聲が、其處此處に聞えた。

兎に角こんなわけで、折角蓉峰の義氣に出でた寄附演劇も失敗に終り、いよ／＼開會といふ事になつて、先づ座の整理を行ひ、來賓を適當の處に据ゑる。來賓は前に言つた三人で、何れも羽織袴の扮裝で喜んで遣つて來たが、當日の光景を見ては、何れも無量の感に堪へなかつたらしい。それも其筈で、昔しボロ着物を着て、五十錢、一圓の融通を乞うたものが、今日では博士とか、局長とか、或は大臣次官とかになつて、皆社會に時めいてゐる。此方側でも昔を考へると珍らしくもあり、なつかしくもある。で、お客を捉へて、「君の處には昔大變厄介になつたが、まだ勘定がいくらか残つてゐる筈だ」とか、「僕も今では其れ位の借金を拂つてもよい」とか言ふものがあつて、互ひ／＼の懷舊談に、笑聲先づ堂に満ちた。

かくて一同席定まつて、幹事が重ねて開會の挨拶をすると、もうあとは思ひ／＼に、昔の態度に立ち返つて、懷舊談やら何やらに花を咲かせ、一人として沈黙を守つてをるものはなく、忽ちにして場内蜂の巢を壊したやうな熱騒を現じて來たのを、幹事は之れを制止して、折角の芝居が失敗に終つたのは遺憾であつたが、幹事が今一つ餘興をやると言つたので、何事が初まるかと一同鳴りを靜めて待つた。

そこで幹事は「これから諸君の若い頃の假聲を使つてお聞きに達する」との前置きで、二三の書物を持出し、之れは數學に於て日本の泰斗と稱せらるゝ藤澤利喜太郎君の假聲だとか、之れは物理學に於て世界のオーソリチイである田中館愛橘君の假聲だとか、之れは現政府にときめける藤田四郎君の假聲だとか、凡そ七八人の若い頃の聲を眞似て、大喝采を博した。

幹事が何うしてこんな眞似をしたかといふに、それには仔細がある。昔し大學生時代に、皆なもの、演説や文章などが未熟だから、之れを稽古するために毎月數回、人を定めて交る交る演説をやつたものであるが、其の演説の草稿は幹事の手許にまとめて保存して置くことゝした。其最終の幹事が私であつたので、草稿は今尙ほ三四十篇ぐらゐ私の手に保存されて居る。

當日讀み上げた假聲は、即ち此の草稿に依つたものである。當時吾々の文章と云つたら頗る幼稚のもので、その草稿は坪内氏の所謂舊惡全書である。そのまづイヤツを、一人について五六行づゝ讀み上げたのであるから、槍玉に上げられた當人は何れも赤面し、會衆は皮肉の喝采を浴せたが、此の喝采者も、お次の番には亦赤面せねばならぬ運命に逢ふなど、なか／＼に面白かつた。が、この假聲使ひもおしまひには、遂に笑はるゝ一人となつたのは是非もないことである。

幹事が此の餘興を濟まして壇を下りる隙を見計らつて、ある同窓が件の書類を奪ひ取り、今度は幹事の假聲を使つてお聞きに達しますと、私の拙な文章を二三通讀み上げたので、一同は更らに喝采したが、自業自得とは此の事を言ふのであらう。兎に角こんなことで、一夕の歡を盡したのは愉快であつた。

## 一八 貢進生時代の大學

同窓の舊を語つた序に、吾等の先輩貢進生のことを聊か附け加へよう。往年（明治三十一

年)杉浦天台道士(重剛)と或る會で落合つた時、氏は貢進生に就て種々語られた。杉浦氏は江州膳所（膳所）の貢進生で、先づ幼少の頃のことから談が始まつた。氏は四歳の時、頼三樹三郎が綱乗物で檻送されるのを母に抱かれながら見たと語るを冒頭として、貢進生に就ては、大藩三名、中藩二名、小藩一名で、各藩は俊秀を抜いて南校へ入學せしめた。其の總數、四百名に及んだ。

當時の學生たる貢進生は大小を脇挟んでゐたもので、「某藩貢進生」と烙印をした札を脇指の束にぶらさけ、弊藩に於きましてはなど、角張つて互ひに挨拶した様を、今から思ふと隔世の感がある。此頃は教場へ出るにも脇指をさしてゐた。勿論各藩の俊才を擧げたことであるから、孰れも漢文位は縦横に書ける連中であつた。然るに教場に入つて學ぶ所は何ぞといふと、ビイ、エ、バなどと子供くさい限りで、中には不平を洩らす者も少なくなかつた。當時はなかなか殺伐の世の中で、學生も帶刀してゐたこと、て、教師に無禮の動作でもあると、教場で脇指を抜き「斬つてしまふ」など、騒ぎ立てるものもあつた。

貢進生は何れも士族出身である爲めに、各自その専門を選ぶに色々の好き嫌ひがあり、法律は、代言のやうな賤しい業だから好ましくないとあつて多くは之れを嫌つた。さりとてエンジ

ニアリングは大工の業だとあつて、これも好まず。専門學科の種類未だ多からぬ當時、それこれと好き嫌ひを言ひ立て、るては學ぶ可き學科もなかつたので、分別もなく舍密科（化學）を修めたものが少なくなかつた。當時の理學専攻家にして、文學に長じた者の一二を挙げると、久原躬弦の如きは某々軍談と題する小説を書き、其の挿畫も自からうまく書いた。小藤文次郎は歌人で、歌をよく詠んだ。渡邊渡も文章家であつた。此他當時文學をよくするもの頗る多く、福富孝季の如き、柄にもなくやさしい歌をよみ、河上謹一は詩を能くし、宮崎道三郎も同じく詩を能くした。西徳次郎が滑稽にして狂歌をよくし、磯野徳三郎は小説に通じたなど、一枚舉に違ない位であつた。自分の洋行中、詩歌の唱酬頻繁で、なか／＼風流のことであつた。

當時芝居好きの三幅對と云はれたのは、西松次郎、福富孝季、磯野徳三郎の三人で、就中西は最も巧者で、自身の觀た芝居の数は百四十にも及び、常にどの芝居でも旨く評し得られないものはないと言つて居た。これには他の二人も三舍を避けた。西は天稟の滑稽家で、或る時水に落ちて學校へ歸つて來た。其の時に仲間の學生がやかましく囃し立てると、西すかさず「西

水に落つる也」と言つた。洒落の「酒」の字を云つたのである。森文部大臣の刺殺された時、彼れは「廢刀者出刃庖丁を横にさし」と詠じた。彼れは又地質學上の難題を巧みに歌に詠じて人を感動せしめたことがあつた。又放屁を以つて有名であつたので、みづから「芳菲山人」と號した。彼れは一夜に放屁百首を詠じて、同窓を驚かしたこともあつた。磊落に世を渡つて、名利の何たるを知らない風があつた。

當時最も亂暴家として聞えたのは、野村珍吉、城多虎雄などいふ連中で、隨分思ひ切つた事をした。大學では此時分齊齋と詔諛とが最も嫌はれ、これを「リンゴン」と言つてゐた。「リンゴン」は齊齋の「リン」と、詔の言扁を合せたものである。そして苟くも「リンゴン」をなすものと認定を受けたが最後、運動場に引出されて必ず鐵拳の三つや四つを喰はされたものであつた。同窓間の制裁は此の通り嚴で、舎長などを煩はすまでもなかつたのである。

此時分面白かつたことで記憶に残つてゐるのを二三語ると、仙石貢は浴衣の儘で卒業證書を受取つたと云ふので、大に非難を受けた。併し彼には實は是れより外に何等の衣服をも持たなかつたのである。某は教場に於て、教師に「スタンド・アップ」(お起ちなさい)と言はれながら

應じなかつたと詰責された。然るに此人は至つて矮小の男で、ベンチに腰をかけて居る方が起立するよりも却つて身長高く見えるので、言譯は立つた。某は絹袴を穿いたとて、同窓がこれを校長に告發した。然るに仔細に之を検すれば、無慮二十五箇所穴のある袴であつた。又ニコライの教堂が駿河臺に立てられた時、當時の大學生等は氣に食はぬことに思つて、他日必ず砲撃するの必要が起るだらうと云うて、大學の機械でこれを測量したことがある。其時機械のスパイダル・ラインを切り破つて大に叱られた。

以上は杉浦氏の談であるが、今日から之を見ると、なかく興味がある。

## 一九 奇想天外の天神講

下谷廣小路にかなめ家といふ小さな店がある。主人は栗原金三というて、深川のさる材木屋の息子であるが、病身である處から、家を弟に譲り、自分は廣小路にさ、やかな店を出して、凝つた細工物を並べて居る。此主人、風の變つた人で、故尾崎紅葉や我輩などを顧問として、色々と凝つた趣向を盡すのを、何よりの樂みにして居たが、その内にこんな珍趣向を凝らした

ことがあつた。

明治三十五年、菅公の千年といふにちなんで、此のかなめ家の主人、前人のおもひ及ばなかつた意匠を凝らし、奇抜な天神講を催した。其の趣向のあらましを言ふと、お客としてはいは四十八字と一二の數字の頭字を有する懇意の顧客を講中に見立て、淨瑠璃の手習鑑の趣向を取つて、講中を寺入りの寺子に擬し、四十八字並びに一から億までの數字の机と鏡箱とを、昔時寺子屋に用ゐた形になぞらへて作り、これを來客の膳ともなし、果ては景物ともして贈らうと言ふのだ。斯ういふ趣向で、九月二十六日が舊曆の二十五日に相當するとして、神田明神境内の開花樓に於て催された。

自分も此の招待を受けて、三時頃に出掛けて見ると、かなめ家主人を初め清水晴鳳など、いふ、かなめ家に深交のある連中は入口に机を構へて、來客に挨拶をして居たが、何れもお粗末な單衣に紺の盲竊の前垂を掛けて居た。よくよく見ると、何れも單衣に肩揚がしてゐるのは、前垂と共に寺子に擬へた一趣向と見受けられた。殊に晴鳳のやうな肥えた男が、短い單衣に肩揚のついてあつた滑稽千萬な様子には、噴飯を禁じ得なかつた。來客は七八十人で、尾崎紅

葉、角田竹冷、竹内久一、武内桂舟などの知人も見え、大槻如電翁を初め、某々の好事家も見えてゐた。

客溜りの大廣間の一隅には、壇を築いて古器數十點を陳列してあつたが、何れもかなめ家好みの器物で、價は二束三文でも、どこやらにをかしまのある品ばかりであつた。それは都府樓の瓦片、豊公の瓢箪、咸陽宮の瓦など、いふ類で、何れも出鱈目の品名を附して、由ありけに陳列されてあつたが、これは福引に取らする景品と知れた。

先づ餘興として、某々の落語家、手品師などが滑稽の技を演じた。それが終つて一方の襖を開くと、こゝには竹内久一が曩きに菅公千年の記念によつて、千體の菅像を彫刻した其の一を、白木の厨子に納め、壇を築いて其の上に飾りつけ、前刻落語を語り、手品を演じた藝人どもは、何れも神主の扮装で、笙筆簾を吹きならし、幣をさき、端然として坐して居る。其の様子可笑しさには、一同どつと笑つた。茲で皆々神前に進んで御酒を戴くと、梅鉢の紋を畫いた陶杯一個づつ、を頒ち、尙ほ松竹梅に囚んだ菓子をも分つた。参拜が終ると、更らに餘興の續きとして、寺子屋の段松王首實驗の茶番を演ずる。講武所の雛妓數名に、めくら縞の單衣を着

せ、寺子に擬したのを出して、一番の舞踏をやらせたのは一趣向であつたが、其服装が寺子に見えず、紡績工女と見えたのも、却つて興を添へた。愈々設けの宴席に這入つて見ると、驚いた。こゝは七八十枚の疊を敷いた大座敷で、床には素岳が石摺様に擬して、かなめ家主人に贈つた空海のいろは歌の大幅をか、けてあつた。正面に置かれた桐製の机が寺子屋先生の席で、左右二列に寺子屋的の揃ひの机を三個づゝ並べ、さしにも廣い座敷も、中央の一條の通路を存する外、机を以つて充たされて居る様子は、いかにも寺子屋の光景をよくも坤出したものと、一同アツと感歎した。

やがて長老の故を以つて今日の先生に推された大槻如電居士は、正面に据ゑられた桐机に凭り、我れ々寺子一同は、各々の机と定まつた所へ着席した。七八十人のお客がズラリと並んだ處は、なか々の見ものであつた。扱て机の結構をよく見ると、もとより粗製ではあるが、寸尺など實用に叶ふやう、よく工夫され、殊に抽斗の中まで丁寧に漆を塗り、硯箱の内方などは、艶消漆塗にした處など、かなめ家の用意のほど、感服の外なかつた。机の上には、硯箱の外に手習草紙と書いた半紙の張られた折箱、並びに手本様のものが載つて居た。試みに硯

箱の蓋を開いて見て、更らに主人の用意に驚かされた。即ち硯箱の中には、硯がある。水滴がある。墨がある。筆がある。何れも席上酒肴に充つ可き食物を以つて作られてあつて、硯は焼豆腐、墨は昆布、水滴は蒲鉾、筆は生姜で、それぐ其の形に擬してゐるので中々に興がある。手習草紙といふ折詰も同じく食物で、輪形の型に飯を押ししたのを、梅鉢の形に排列してゐるのは、菅公の紋に擬したものである。其の他飯の菜に、海老や金柑や昆布や柚子や章魚なんどの入れてあるのも、ウツカリして居れば無意味のやうであるが、實は矢張り寺子屋の戯曲の文言から意を取り來つたものと思はれた。例へば金柑は金冠、海老は梅王の顔のクマ、昆布の青く細く切つたのは松王の松になぞらへ、柚子の輪切の中のスの明いたのは御所車の洒落ではないかなどと、考へれば考へるほど興味が湧く。又手本の如きものは紙製の柱懸を二つ折にしたもので、中に短冊一枚と手巾一枚とが挿まれてあつた。

こんなことで、來會者一同が主人の趣向ぶりに感歎の詞止めもあへぬ中に、けふの寺子屋先生たる大槻如電入道は起立して一場の挨拶をなし、今日は讀書を廢して直ちに清書に取りかゝる可し、先づ十分に墨を磨られたし、誰れかある、硯水を持てと叫ぶや、芝居が、りでハイ

ハイと、先きに寺子に扮した雑妓と、素人風に扮した大妓は、各々酒瓶を携へて次の間より出で来り、いざ硯水を差上げんと、銘々に酌をする。其の間には、吸ひ物や取り肴などを配るものもある。この吸ひ物も肴も、何れも趣向を含蓄して居るやうに見受けたが、今は既に忘れてしまつた。斯くて酒酣にして、銘々得意の隠し藝が湧くがごとくに起り、時ならぬ春けしきを演じたが、私は早く辭して歸つた。明治の世に元祿の昔を偲ばする珍趣向、馬鹿けて居ると言はゞ言へ、這間の趣味は、功利にのみ醜態たるもの、遂に解する能はざる所であらう。

## 二〇 高嶋吞象翁と語る

私が明治三十四年養痾の爲め數月熱海に日を暮らした其折、無聊に堪へず、隣室に高島嘉右衛門氏がゐたのを幸ひに、互ひに往來を始めて懇意の關係が生じた。氏は此時分古稀に近かつたか或は古稀を過ぎてゐたか、高齢であつたに相違ないが、年不似合に若々としてゐた。例の長幹で風采が揚り、話に富んで辯舌がよく、記憶力に於ては驚くべきものがあつた。毎日晚餐の後互ひに語るのが例であつて、それが爲め鬱悶を排したのみか、得る所も少なく無かつた。

翁の得意とする處は易斷であつたから多くの談話は易斷に觸れたが、それには餘り趣味を有つてゐぬ私は、寧ろ翁が維新の際に實歴した追懐の談が面白かつた。翁は大隈侯とは相識の間柄であつたから自然私に侯の平生を問はれたので、私の談話は主に侯に關してゝあつた。私が當時暇に任せて翁の談話を筆録したものが數冊に迫んでゐる。今其内から特に興味のある談を摘録しよう。記事は稍々長いが、維新史の好資料が少なくないから、繁を厭はず爰に紹介する。

### 京濱間の鐵道

第一に話題に上つたのは京濱間の鐵道に就てであつた。翁曰く、明治の初年、奥羽鐵道をもくろんだのも、京濱間の鐵道を企てたのも等しく私であつた。私は其頃から大隈、伊藤の諸公と知合つてゐたが、或時兩公が私の宅へ來合はされたから、試みに京濱間の鐵道計畫の事を話し出して見ると、兩公も強ち反對でない様子で、顔付を見るとニコクとして居らるゝから、何でもこれは計畫すれば物になる、それにしても先立つものは金だがと案じ居る内、英國商人で上

海迄来た序に日本へ廻つた大金持が横濱へ来た。コヤツ談ずべしと云ふので、其時私の宅へ食客同様に來てゐた連中の内、富永冬樹、横山孫一郎の二氏を遣つて、此商人に談じさせた處が、話しが追々進行して五ケ年（？）据置で五年目より三十萬圓づゝ返金、合せて三百萬圓、抵當には政府より受取るべき鐵道布設許可書を差入るゝと云ふ條件で、相手も略々承諾の様子に見えたから、めめたと云ふので、大隈さんを訪ねた。

大隈さんを訪ねると、其席に伊藤さんも机に倚り、横文字の書狀を認めて居られた。そこで私は大隈さんに向つて鐵道を敷設するの急なるを説き、私設を許して貰ひたいと云ふと、大隈さんは許すまいものでもないが金は何うすると云はれた。ソラ來たと云ふので、某外商と交渉の成行をあらまし話して先方から承諾の意を示した書面などを見せると、大隈さんはカラ／＼と笑ひ出された。「高島、お前は人がよくて困る、外國人が何で三百萬圓の大金を貸すものか、貸すと云ふのは相手の山だ」とテンで相手にならない様な挨拶で困つて居ると、今迄黙して書面を認めてゐた伊藤さんは、私の方を顧み「高島、鐵道をやる前に先づ洋行して來るがよい」と、これも大隈さんに左袒して、私を冷かすのであつたから、まだ時機は熟さないと見て話し

はそれなりとじて戻つた。

その後店の手代共の間に一つの不思議な噂が高まつた。それは富永冬樹が千五百圓で地面を買つたと云ふ噂である。富永は當時私の宅に三十圓許り貰つてゴロ／＼して居る位であるから、千五百圓の土地などの買へる筈はないのだ。變な事と思つて、或時富永を呼んで聞いて見ると、事實であると云ふから益々不審に堪へず、立入つて段々聞いて見て初めて驚いた。大隈さんは過ぐる日私に向つて冷淡に挨拶したのは胸に一物あるからで、私が外商と交渉した様子を見て取り、政府より談判すれば外資借入は確かに届くと見たから、私が大隈さんの處を辭した足移しに大隈さんは馬車を驅り、右外商の處へかけつけ、そこで政府との間に談判が調ひ、それが爲め外商は急に歸途に就くことになつた。然るに此事を聞嚙つた富永は驚くこと一方ならず、既に船に乗り込んだ外商を訪ひ、折角こしらつた談判を政府に横取されたのは詮方なしとして、當てにした「コンミション」を取損うたのは實に困ると泣く許りに訴へたので、外商も五月蠅くて溜らず、涙金千五百圓を小切手で呉れたのを、正直に此の金全部を以て地面を買つたのだと知れて、私も初めて政府のなか／＼人の悪いに驚いた。丁度大隈さんが他の事件でパー

クスにすがり金を借り出した時分で、金の出来たとき私の宅へ立寄られ、「ドウだ高島、金を見せようか」と自慢氣に見せられた事がある。此時分の大隈さんは覺束ない金の番頭さんでしたよ。

## 高 島 學 校

私が經營した横濱の高嶋學校の盛んな時分には、七百人以上ばかり生徒がゐた。諸藩の貢進生などの喰ひつぶしも多かつた。此時分福澤は私塾を有つて居つたけれども、微々たるものであつた。あるとき福澤を教師に頼まうと思ひ立つて出かけた。アンな人であるから減多の事では承知すまいと思つたから、少し工夫して出掛けた。そこで福澤に向つて「ドウです、私の學校へ來て呉れませんか、徒<sup>た</sup>ではない、來て下されば其代り御子息二人を洋行させる」と斯う出たので、流石の福澤もマンザラでない様子で「なるほど、一日考へさせて下さい」と云ふから、大抵話は屆くであらうと豫期して居ると、そこは福澤だ、次の日の挨拶に、實は學問は自分より幾等高いものが塾中にある、自分よりもそれがよからうと云ふので、小幡の兄や外に二人許り

よこされたが、實は福澤に一抔喰はされたのである。

學校に就て今一つ可笑しい事がある。學校が追々繁盛に赴くのを見て、教育の爲め嘉みす可しと云ふので、政府より賞狀に三組銀杯を添へて賜つた事がある。これを外國の公使が聞きつけて、祝意を表する爲めに遣つて來た。そこで賞狀の文意を譯して聞かせ銀杯を見せると公使は驚いた。彼等は勳章を買つた事と思つて祝しに來たのである。日本で勳章と同様銀杯を賞典に用ゐる習慣のある事を彼等は未だ知らなかつたのである。それであるから驚いたのも無理はないが、彼等は斯様に云つた。全體勳章と云ふものは、人の視目を惹くやう胸間に掲げて信用を標榜するものであるが、この杯は抑々酒を飲む器具では無いか。酒を飲むは寧ろ人生の惡徳である。即ち之れを有するは、取りも直さず不信用を表章するものにあらずやと、斯様の論法であつた。その日恰も徳大寺さんが宅へ見えられてゐたから、此話しをすると、徳大寺さんも頭を搔かれた。

易を心掛けた動機

鐵道や學校や瓦斯やいろ／＼の事業話しが濟むと、例の易談が初まつた。易談の聽聞は吞象翁と談を交へるもの、豫じめ覺悟を極め置かざるを得ざることであるから、私も最早出るだらうと思つてゐるが果して出た。處で此の問題になると、なか／＼話しが長いのに閉口した。幾んど四時間許りノベツに語り續けられたが、併しマンザラでもなかつた。先づ私より君は全體どんな動機から易學を心掛けられたかと問ふと、曰く、實は私の親は無學であつたから、私は少しばかりでも本は讀みたいと心掛け、四書、五經の「經典餘師」を相手にポツ／＼研究して見ると、少しづつ、は意味もわかるので、易の如きも、全く「經典餘師」に依り入門したのである。然るにまだ二十臺の時であつたが、あるとき八卦を置いて見ると大火のあるべき卦が出た。そこで材木を買占めると果して江戸の大地震があつたので、成る程八卦と云ふものは尊いものだと感じた。其後鍋島家へ出入して小判を外國人に賣つた事がある、それが顯はれて入牢を申付けられ、六年許り獄中の身となつたが、これが易學研究の爲め天の與へた機會であつて、一圖に易の正文を暗誦した。暗誦して居る内に研究もした。そこで第一自分の運命はドウなるのであらうかと考へると、夙夜心配でたまらない。そこで一生懸命になつて占つて見る

と、水の卦が出たから、これは助かる、或は遠島へ流罪を命ぜらるゝも知れんと考へた。又卦の内に十年經つと運が開けるとあるので初めて安心したが、後日に徴すると果して此卦がよく當つてゐる。則ち弊屋へ陛下の行幸を辱うしたのは丁度十年目であつた。こんな事から段々八卦に身を入れる様になり、又一牛懸命の場合に占つた其呼吸が神祕を發く鍵であるが、その鍵が手に入つたと云ふ様な次第である。

## インスピレーション

神祕を發く鍵だの、占ひの呼吸など云ふ話しが出る、私にも久しく釋けない疑團があるのだ、そこでこれを香象翁に質さうと思つて、試に問うて見た。周易は如何にも理窟をよく並べたものである。某卦の下に某々の理窟が附帶し、吉には吉の理があり、凶には不吉の理がある。それは宜しいが、扱て某の卦、某の卦を筮竹に依つて得ると云ふのは偶然だと思ふ。偶然に得た卦を以つて人の禍福を卜すると云ふ事は妄ではあるまいかと云ふと、翁曰く、決して偶然ではない、先刻の所謂呼吸と云ふは即ち之れである。筮竹を握つて冥目沈思一番すれば、自

然に適中の卦に當る。これは不思議と云へば不思議だが、其實不思議でない。射を以つて譬へて見ると、的に適中するや否やは矢を放つて未だ的に達せざる内に凡を分ると同じ理法だ。易に通ぜざるものは一概に筮竹をヒネクリ廻はずを見て、雙六の賽でも投るはく様に考へて居るけれども、決してそんなものではない。筮竹に依つて卦を定めるのは、神と相談の上で定めるのだ。一種のインスピレーションだ。即ち私はこれを道と云ふ。道とは何ぞ、首走くまる也、即ち首は走つて神に驅けつけて相談をするから道と云ふのである。曾て伊藤さんと大に易を論じたことがあつたが、其時結局伊藤さんをして一言なからしめたのは此の道の論であつたといふ。翁の道の見解も亦奇なる哉だ。

### 敬字翁に關する話

翁が易で當てた話しは、夫子自身の言ふ所ではなかく、多いやうであるが、中には随分ホラもあるとして、中村敬字翁が呑象翁の門人となつた話しのごときは面白くもあり、また虚構らしくもない。翁曰く、中村敬字と云ふ人は三歳にして字を知り七歳にして詩を作つた神童で、

當時の大名（閑叟の如きも其人なり）で試めした人も少なくなかつたが、何れも感服した。そこで當時佐藤一齋、鹽谷宕陰は申合せて、あれを見せもの同然にして置くは惜しいものだ、シツカリ教へて大家にしよう云ふので、母親にも談じ遂に聖堂に入れた處、無論成績がよかつて洋行迄させられた。此中村はあの通りの君子であるから、金などの出来る譯はないが、何か翻譯をするとヒドク賣れるものであるから、意外の収入があつた。中村は本を賣つて得た金だから本を買はうと云ふので大分書籍を購うたが、なか／＼書籍を買つても餘るものだから、遂には公債證書を買ひ、別莊を建てると云ふ様になつた。然る處中村の養子、これは細君の實家から買つたのであるが、あるとき薩摩の人に投機の勧めを受けて大失敗をした。それはドウ云ふ譯かと云ふに、薩摩には公債證書が非常にやすく買へるから買占めようと云ふので、平沼専藏から高利を借りて遙々薩摩迄かけると、第一宿泊した家の主人が身代限をした者であることを知らずに、之れに大金を預けたのが間違ひで、主人は金を持つて逐電して仕舞つた。サアそこで平沼専藏がなか／＼やかましい。中村敬宇はあの通りの人であるから、こんな事には無論關係はないが、肝腎な實印を養子に預けて置いたから、證文には中村敬宇の判がついてあ

る。君子もこれが爲め意外のか、り合となり、是非共二三萬圓の金を濟まさなければならぬ仕儀となり、敬宇老人大弱りで、私の處へやつて来て、ドウか易を頼むと云ふから置いて見た處が差支はない。中村に卦を示し、こんな鹽梅であるからあせる可からず、あせらざれば君を救ふ人があると説明すると、中村は大いに喜んで、此時は躍り出した。さうして私のやうなものが大學で易を教へるとは實に恥入つた次第である、以來は君の門人になると云はれた。

それで段々後になつて見ると果して卦の通りで、遂に救ふ人が出て来た。それは誰かと云ふと山岡鐵舟である。鐵舟は敬宇浮沈の關する所であると聞くと、直ちに電報で平專を召喚した。平專は何心なく招きに應じて行くと、鐵舟は座敷に儼然と坐し、近く寄られよと云ふ。段段近く寄ると、イキナリ片手に胸倉を捉へ片手に鐵拳を丸め、中村の如き君子人をたばかるとは不届至極の奴ぢや、飽くまで非を遂げるとあらばこれなる鐵拳で臍蓋を微塵になし呉れんと、アハヤ鐵槌降り來らんずる見暮に、流石の平專氣も魂も身に添はず、只管に詫入り、不當の要求を撤した爲め、敬宇も助かつたのである。此時は敬宇も易のよく當つたには心から感服した。感服の極は耶蘇教の信仰を見合はせ、一意易に力をこめた。これが翁の自慢話の一つで

ある。

### 易の翻譯

翁はなかく話上手である。どこやら講釋師メイた句調もあるが、感服するのは記憶のよい一事である。經書の文句など驚く程よく記憶してゐるのは勉めて記憶したのでもあらうが、さまで大切でもない文章、例へば栗本蠲雲が彼れの易斷に序した長篇の如き、彼れが政府から貰つた褒狀の文言の如き、話しの間に挿んで、水の流るゝが如く朗誦するに至つては勉めて記憶したものとも思へない、天稟の性と判する外はない。彼れが易に凝つて兎に角大家と呼べる、に至つたのも恐らく記憶のよい所から馴致したのではあるまいかと思ふ。今一つ彼れの話を擧げよう、如何に彼れが話上手なるかを見よ。それは易の翻譯を人に頼んだ話である。翁曰く、往年米國で萬國宗教大會を開いた時、易を翻譯し、自分の考へも加へて平易に西洋人に知らせん事を欲し、出版を目論んだが、困つた事には易を翻譯する位な腕者がない。偶々此時分杉浦重剛や、死んだ巖谷の息子立太郎などと云へる面々が私の處へ議論に來た事がある。杉浦等の

意氣は、初めは天を衝くばかりであつたが、段々論じて見ると私の云ふことに味があるから、彼等も遂に兜を脱ぎ、改めて私の門下生となつて、それから彼等の請求に任せ、毎週神田の英語學校の跡へ出張して講釋をする事になつた。杉浦等も段々易の事がわかつて來た様であるから、私より翻譯料として一千圓の金を添へ、自分著述の易を翻譯して貰ひたいと頼んだ。杉浦は受け込んだが、さて易のやうなむづかしいものを縦横に翻譯するは容易の業でない。杉浦は頭本元貞に頼んだ。頭本は當時の日本人中最も翻譯の名人として人に許された人であるけれども、此翻譯には頗る困つたのである。

### 面 白 い 按 摩

話は少し横道に入るが、これより先き私は高崎最寄の倉我野くらがのと云ふ處へ旅行し、宿の無聊を遣らんと按摩を呼んで揉ませながら、四方八方の話をする、按摩が身の上話を初めた。此按摩、年もよらぬに感心な事を云ふのが氣に喰つた。それはドウかと云ふに、眼の見えない不具となり、親を十分養ふ事が出来ない、親に對して誠に濟まないと云ふのである。不具なれ

ば大抵は親を怨むものであるのに、これは感心だと思つて、おれは神奈川の高嶋と云ふものがあるが、若し神奈川へ來たらば立寄れと云うて別れた。然るに其後果して此の按摩が遣つて來た。そこで私の家にも按摩の一人位は入用であるから、毎日揉ませる傍ら易を教へて見ると、一生懸命に習うから段々に覺えて來た。盲人は目明に較べると一得あるもので、暗誦と來ると目明は叶はない。私の宅へ出入りする多くの弟子も、遂には此按摩に叶はない位に上達した。取り分け私の假辭をよく使ふと云ふので、門弟中に評判になつた。そこで東京の平河町の宿屋上總屋の主人は私に仕へたものであるから、それに頼んで其の附近に家を借り、此の按摩に世帯を持たせ、親には百五十圓で船を買つて與へた。親は船營業だと云ふからである。

ある時上總屋へ行つて客の肩を揉んで居ると、客が來てそれと段々語るのを聞くと、肩を揉ませてゐる人が云ふには、此頃高嶋より易の翻譯を頼まれたが、ドウもこれには困る、何とも筆の下し様がないなど云ふ話もあつて、訪ねて來た客は間もなく立去つた。按摩は客に向ひ、あなたは高嶋の易を翻譯するに困つて居らるゝと仰つしやつたが全體ドンな處が翻譯しにくいのです。實は私も高嶋の門人で、一通りは心得て居るつもりですが、試みに高嶋さんの易の説

き方をこゝで申して見ませうかと云ふので、客は意外なのに驚いたも理り、半ば好奇心に驅られて一議に及ばず、其説き方を聽かんと云ふから、按摩は肩につかまりながら、得意の高嶋の假辭をやるので客も全く驚き、按摩はドウでも宜しいから、ドウぞ翻譯の手傳を頼むと云うて、初めて頭本なることを名乗り、翁の著述の分り兼ねる節々を按摩に相談に及び漸く翻譯の出来上つたのが、即ち往年日本から渡航した坊さんや神主に頼んで萬國宗教大會へ送本した歐文の拙著である。此の按摩は鈴木康伯と申したが、先年歿したとは、翁の手柄はなしの第二であつた。

### 象山變死の卦

ある夜また翁と語る。談佐久間象山の事に及ぶと、翁はまた八卦の話を持出した。併し之は余には耳新しい話しであつた。翁曰く、象山は吉田松陰の外航の企を賛成し、之に詩を贈つた事から幕府の忌諱に觸れ、松代藩にお預けとなりそこに蟄居して居ると、當時京都に居られた、時の副將軍徳川慶喜公よりお召しが來た。松代藩主も我藩の名譽であると云ふので、金千圓を

象山に與へて、匆々旅装を調へさせた。處が象山は久しく蟄居の身であつたから馬を持たなかつた。そこで差當り馬を物色した處が、幸ひに良馬があつて、百二十圓の大金を投じてこれを求め、都へ上る用であると云ふ處から「都路アヤシ」と命名した。

サア愈々出發と決したが、門人の北澤（正誠）が遣つて來て、先生、今度の都上りに就ては定めて易を御覽でありましたらう、易の表は如何でありますかと問うた。象山は易には巧者であり、重大な場合には易を見るのが例であつたから、此問は當然の間であつた。象山は、ナニ將軍のお召だから易は見ないと云うたが、其時初めて氣が付き筮竹を取つて見ると「澤天夫たくんくわい」の上爻が出た。此の卦は森有禮の殺されたときにも出た、李鴻章の狙撃された時にも此卦の第二爻が出たのである。此卦には「夫フ揚イ于王庭グ孚弋號フ有厲キョト」とあつて、實に危険な卦である。かくの如く澤天夫が出たから象山氣にかけないではないが、仕方がないからそこへ出發した。途中で大阪に小原鐵心を訪うたが、小原は象山の上洛を賀し且つ易の表を問はれたについて、澤天夫を得た事を話した。小原も妙に思つたが、深くも言はずして別れた。

扱て京都では慶喜公に謁して外交意見を陳べ、滞在して居る内に、一日中川宮なかがはのみやのお招きを受

け、象山喜んで参上すると、いろ／＼のお尋があつて西洋各國の事など申上げ、宮にもお喜びになり、御酒を賜はり、馬術の話などもはじまり、象山は馬の名人であるから頻りに馬の講釋やら鞍の講釋をなし、終にお庭先で騎馬の御所望があつたから、象山いたく面目に思つて、直ちにお受を申上げ、西洋の鞍を置いた例の新購の馬を引出して騎ると、馬は稀代の逸物、騎手は當代の名人、鞍上人なく、鞍下馬なしの妙技に、宮は如何にもと感歎あり、厚きお詞を賜はつたので、象山も喜悅斜ならず、一身の面目、藩の面目此上ないと、記念の爲め「王庭」の名を馬に命じた。之れには象山も氣が付かなかつたのであるが、易の表にはハッキリ顯はれてあるので、王庭に揚ぐ、孚に號ふ、厲きこと有りて、實に危い事限りなしであるが、果せる哉、象山は此夜辭して宿屋へ歸る途中暗殺に出遇つたのである。ドウです、易は恐しいものでありませんか。

## 外商と贖金

幕府の末路に各藩競つて二分金の贖金を造り、幾んど贖造をやらぬ藩は無い位であつた。そ

こゝで横濱に居留してゐた外商はしばし、新政府に訴へたけれども、新政府とても致方がないから事に託して遷延して居ると、外商の訴へが益々急になり、若し日本政府で速かに贖金の引替を爲さざるに於ては、已むを得ず本國に照會して戦争を開くより外はないと云ふ筆法で脅迫に及んだから大久保や木戸も幾んど困却して大隈と伊藤に闘ると、宜しい、速かに處分しますと云うた。實は速かに處分と云ふけれども、なか／＼困難だらうと窺かに考へて居ると、苦もなく大隈が處分したのには大久保も木戸も驚いた。それは如何にと云ふに、大隈は時の東京府の參事大江弘を呼び出し、今夜中に是非東京全市二百八九十軒の兩替屋へ布令を出し、明日早朝築地汽船場へ集る様に嚴命を下された。そこで翌朝何事かと全市の兩替屋が集まつて見ると、これより横濱へ行き、外人の所有金の眞贋を鑑定せしむるのであると云ふので、一艘の汽船に三百人近くの兩替屋を載せて横濱へ出かけた。

是れより先き、外商が贖金の弊を訴へ、大隈が引替を諾すると聞かや、内商の狡猾者流は外商に託し自家所有の贖金を引替へて貰はんと企んだ。大隈は疾く此事あらんと知つたから、擬てこそ兩替屋を召連れ、突如眞贋の検査を初めたのである。横濱へ汽船が着くと外商へ布令を

發し、卽刻金を持參せよと命じた。餘りに急であるから、内商も狡猾手段を施すの餘地がなかつた。それでドレだけの金が集まつたか、初めは政府も四五百萬の金が集まるであらうと期し、引替に渡すべき金などは實は少しもないのであるから、内々心配してゐた處、案外に出て來た金が少なく僅かに四十五萬兩程であつた。それを三百に垂んとする兩替屋に手分をさせ、検査をなさしめた結果、二十五萬兩丈が贋金、二十萬兩は正貨であると云ふ事がわかつた。そこで贋金二十五萬兩をば、三井を呼んで若干づゝを包んで封印をなさしめ、扱て外商を招いて曰く、眞贋の検査をさせた處が二十萬兩丈は眞正の通貨であるから安心して宜しい、二十五萬兩は贋金に相違ないが、三井の封印した儘政府の上納金に用ゐれば、何れの手より來るも政府は差支なく受領すると申渡したので、外商は初めて安堵して引取つた。これが一金をも動かさず四十五萬兩の引替に應じた當時の奇談で、大久保も木戸もこれを聞いて、大隈の臨機の才略に驚歎したと云ふ事である。

福岡縣の贋札とりしらべに、彈正臺から渡邊昇が出かけたはなしがある。このとき、渡邊は單身で、五十二萬石の福岡の城の二ノ丸で、大勢が寄つて掛つて精出して贋札をこしらへてゐる

る處へ出かけて、おれは彈正臺から來た、印形を渡せと云ふので、質札に捺してゐる偽造官印を先づ押收して、しづくと引上げた。これもなか／＼常人の真似の出來ない仕業と云はなければならぬ。

## 薩摩武士

翁と話次、維新頃の武士談にも涉つた。翁曰く、幕府の末造より維新の初めにかけて、何にしてもエラカつたのは薩摩である。當時三萬の兵を養つて居つたのは薩摩の外にはなかつた。常に兵の數が多いばかりでない、薩摩には全く立派な侍が多かつた。一つ二つ、今活きて居る（明治卅四年頃）人の事を云つて見よう。

奈良原（繁氏）などは實に強かつた。伏見の寺田屋に四十人ばかりのやかましい浪人が居る、その内五人は薩摩であると云ふ處から、藩では奈良原外四人を呼んで臨機の仕末をして來いと言ひつけた。決死の五人に對して矢張り指向したのは五人である。臨機の仕末と云ふのは、場合に依つては殺して來いと云ふのだ、随分難儀の役である。五人對五人は力相角すると

するも、寺田屋は浪人の屯所である、何人合同して手向ふやら分つたものでないのを、奈良原は平氣なもので、先づ眞先に單身出かけて、一人の薩摩出身の浪士と會して遂にバラして仕舞つたから、其物音に大勢は抜きつれて奈良原を圍んだ。すると奈良原は大小を放り出し、兩肌を脱いで、諸君に手向ふものでない、御安心あれと云うた。なか／＼これが大抵のものに遣れる業でない。

それから海江田（故信義子）だ。今こそ穩おとな願ねがしさうな老人だが中々やかましい男だ。あるとき禮聘使が東海道を通つて掛川へかゝつて旅館をもとめると、一番上等の宿泊所が塞がつて居るので、其次の宿屋に泊まることになつた。實は英吉利公使パークスが第一等の旅館に泊まつて居るので、禮聘使の供づればこれを知つて居るから、例の如く屈竟のユスリものだ、一番ユスラんと拔身でパークスの旅宿へ上り込んだ騒ぎに、公使は縁の下へ逃げ込んだ、それを無暗にピストルで打つと云ふ亂暴。それを見た掛川藩も、己むなく警衛の爲め拔劍の士卒を以つて禮聘使の旅館を圍み、矢鱈に供勢が館外に出て跋扈出來ぬ様にした。そこへ海江田は他事を以つて此驛に一泊し、此事を聞かや、よせばよいのに單身掛川の城へ推しかけ、勅使を捕虜にす

るとは吾れ未だ先例を知らずと一本ヤツ付けたから、掛川藩も驚いて狼狽の餘り、此の一言の爲に奉行に切腹を命じた事がある。

## 閑叟公の事ども

翁は鍋嶋家の御用をつとめて居つたから、鍋嶋家の事をよく知つて居る。曰く、鍋嶋家も閑叟さんの前は實に氣の毒な程貧乏落であつたのです。それも其善で、閑叟さんの親と云ふ人はなか／＼道樂もので、それが爲めに隠居を餘義なくされた人である。一例を云へば、此人は山下門を入ると見える屋敷に恐ろしい高い三階を造つた。當時はガラスなどは随分高價の贅澤品と云はれてゐた時代なのに、ガラスの柱などを建て、中に金魚を泳がすと云ふ趣向。又侍女や妾などに肌の透き通る紗の衣服を着せて戯れて居つた位な始末であるから、藩中でもやかましく、筆頭の家老職諫早は之れを聞いて上京すると、直ちに一夜の間に此の樓閣を打壊した、そこで殿様も泣寝入りと云ふ鹽梅であつた。當時は一家老の爲す通りに従つて居らねばならぬ様に殿様達は心得て居つたのだ。鍋嶋の家老と云うても矢張り一つの大名であるから、殿様も無

暗に駄々を云ふ譯にはゆかないのである。これは唯だ贅澤の一例に過ぎないが、侯は遂に家老職に隠居させられたのである。

閑叟公が相續されて歸國のときの財政困難と云うたら實にヒドかつた。當時の規則寧ろ習慣では、大名が歸國せんとする前日、登城して將軍家に暇乞をなし、其足で老中の邸を歴訪し、留守中の事をよろしく頼むと挨拶する、そこで翌朝老中が挨拶にやつて来る、その挨拶が終れば直ちに發足すると云ふが習慣であつた。處が閑叟さんに於かれては、老中との挨拶は濟んでも出發が出来ない、ナゼと云ふに、萬事は濟んでも大切な旅費が出来なかつたからである。閑叟さんは供勢をも連れずに、單騎品川に出かけ、待つて居らるゝと云ふ始末であつた。そこで家老の面々も痛心して、已むを得ず茶器を長持に入れたのを一個木場の鹿島へ持ち込んで、これを抵當に三千兩即時用立てよと依頼した。鹿島もさるものであるから長持を明けて調べて見ると、實にエライ珍仕がある、なか／＼三千兩どころの物ではない、そこで鹿島も怒が起り、抵當として貸す譯にはゆかないが、譲ると云ふなら即座に三千兩渡すと返答した。何にしても足元を見られて居ることだから、鍋嶋家でも據ろなく賣る事を諾し、漸やくの事で三千兩調達し

て殿様を立たせたと云ふ様な始末。鹿嶋はこれが爲めに非常の大金をまうけ、當時數個所の地面を買つたと云ふ事である。

斯様の譯で、閑叟さんも貧乏にはツクツク懲りたから、歸國すると共に心を藩の財政に注いだ。最初先づいろいろの手段で人心の歸向を博し、人心の歸向の盛んなるを見ると土地に竿入をはじめたか、誰れも不服を云ふものがなかつた。此の竿入で打出した高が六萬石で、藩では此の金を以つて海を埋めて開拓をはじめ、これが爲めに一段の富を増した。そこで今度は漸やく出來た金を元として札を發行したが、藩の遣り方がなかく旨いので札が非常の信用を博した。それはドウしたかと云ふと、町の辻へ神樂堂の様な引換所を設け、これに氣の利いた男を三四人坐らせ、金が這入つて居るかドウか知らんが、千兩箱をいくつとなく積んで置き、札の引換を請求に來ると深切に扱ひ、まるで商人が兩替をして呉れる様な呼吸であるから、誰れも安心した。これは佐賀ばかりでなく、大阪でも長崎でもやつたが、鍋嶋の遣り口がこんなわけであるから、間もなく好評を博して、正金を持つて歩くより鍋嶋藩の札を持つて歩く方が便利だと云ふやうになり、他藩でも遂には正金を鍋嶋の札と引換へて旅をする事になつた。此の手

段で鍋嶋家が小判を吸収したことはエライもので、幕末に自分の金で戦争したものは鍋嶋家其他二三しかないが、實にこれが原因である。

鍋嶋家が子弟の教育に力を致した事もなかく、通常の手段ではなかつた。文武の免狀を貰はないものには妻を迎へるを禁じたから、一家の相續上是非勵まねばならなかつた。又娘を呉れる側からも、是非相手を勵まさざるを得ないから、教育獎勵は自然に行届いた。そこで修業中は如何なる門地ある者の子弟でも、輪番に市中へ青物や魚を買ひに出され、炊事にも當らざるを得ない仕組となつてゐたから、世帯を持つても一ト通り俗事を心得てゐた。これも藩の工夫がよいからの結果と云はねばならぬ。又西洋の學問や藝術の如きも、長崎が近いからぬかりはない。逸早く人を遣して研究もさせた。新奇の書籍や軍器の類なども買はせたから、幕府の知らない内に鍋嶋では新奇の事を何でも知つてゐた、又何でも持つてゐると云ふ状態であつた。大隈さんもなか／＼大膽な人であつた。あの人が長崎に私塾を開いてゐたとき、薩摩の小松帶刀も同じく私塾を有つてゐたが、ある時加州の書生が薩摩の書生に愚弄されたのを憤り、二人で此薩人を殺したから大變だ、薩の書生が總が、りで加州の書生を追つかけた。そこで加

州の書生は溜らず大隈の塾へかけ込んで救を乞うた。大隈さんはあんな人だから、よろしいと受け込んだ。間もなく薩摩の大勢が拔身で遣つて來たのを、大隈さんは短刀一本さしたきりで平然と應接して、荒くれ連中を靜かに歸したのは全く度胸の然らしむる處であつた。

幕府が品川に砲臺を築いたにつき、之れに据ゑつける大砲製造の任に當つたものは鍋嶋家である。試射をやる時には幕府の重職は何れも立會つたが、鍋嶋家から試射の爲めに出張した侍は、砲身の上のつて居りながら發砲させた。居並ぶ幕府の面々は發砲の響きで何れもブツ倒れた。唯だ僅に筒井飛驒守と云ふ老人が、筈をつきながら床几に腰をかけて居たので、僥倖に倒れなかつたと云ふ事である。此れ位鍋嶋の侍と幕吏には違ひがあつたのである。

硫黄嶋と長崎の間へ、多くの壞れ船に材木を載せて沈めた、其結果、従前の如く外國船が自在に通られない様にしたのも鍋嶋である。斯様に船の這入らぬ様にして置いて、又硫黄嶋には敵艦の水際を打つ大砲を据付けたから外國人も驚いて、それから浦賀へ廻る様になつた。そこで鍋嶋では此の要害を作つたのを名として參勤の御免を願ひ、課役の御免を願ひ、いろいろ便利な無心を提出したが皆聞き濟まれた。要するに、閑叟さんの政治と云ふものはこんな工合

で、なか／＼旨かつた。そこで誰れが帷幕の内に居つて萬端の驅引をしたかと云ふと、田中善右衛門と云ふ人であつた。この人は所謂る加判列と云ふので、家老に次ぐの重職であつた、即ち事實上の家老は此の加判列であるのだ。

### 鍋島の田中

江戸の鍋島の屋敷はなか／＼規則のやかましい邸で、どんな重職でも、午後の五つを過ぎると門をしめる、門限を過ぎて歸るものは一度は允すが、二度となると國元へおつ返して仕舞ふ掟で、少しも容赦がなかつた。田中は斯る嚴則の下に於て度々門限をおくれてかへり、或は外泊することもあつた。そこで度々國元へ戻されたが、戻ると直きに上つて來る。蓋し閑叟さんより内旨を受けて江戸表に交際の衝に當つて居るから、外泊する事のあるのも無理はないので、終には君公の命で田中だけ門限無しと云ふ事になつた。

當時田中は一日三十兩の交際費を貰つてゐたから、なか／＼の贅澤であつたが、私(吞象)は幾んど毎日田中の家へ往來してゐた。田中が惡所へ行く時分に同行したこともある。田中が

如何に幕府の役人に金を與へたかについては、チヨット一例を擧げると、猿若座へ芝居見物に出かける、柳橋や吉原の藝妓や自分の妾（此の田中と云ふ人は老人のくせに女好きで、若い妾を幾人も有つてゐた）や末社を澤山に連れて出かけるのであるから、幾んど棧敷の重なる部分を獨擅すると云ふ勢であつた。そこで附いてゐる坊主より内々に其筋へ鍋嶋の田中が來てゐると通ずると、警護の爲めに役人が遣つて來て、これも設けの棧敷に居並ぶ、又江戸中の重立つた陸引をかひきも遣つて來ると云ふ騒ぎであるから、幾んど其の日は買切りと云ふさまであつた。そこで食事時になると、田中よりとして五兩許りの折詰に小判を十枚づ、包んだのを載せて、御苦勞でござると云ふ挨拶をさせる。先づこんな鹽梅だから、幕府の役人も田中にかゝつては、大抵の事はいやと云はれない、それだから課賦も免かれる、參勤も免ぜられると云ふ様な、いろいろ都合のよい事が出來たのである。

さて芝居が濟むと、田中は一同（役人は除く）妾や藝者や末社を連れて吉原へ繰り込む。そこで當時女ずきのする役者坂東彦三郎や半四郎の如きものをも同伴して、一夜女どもに勝手に雑魚寐をさせる。これはさぞ老人の働ばかりして居るは辛いであらうと云ふ推量より、御馳走

を妾等にするのである。それだから田中と云ふものは幕府の役人にのみでなく、また女にも評判のよい爺さんであつた。嘗て大隈、伊藤、井上の諸公が、熱海へ來られた時、今井半四郎方で伊藤さん達が無暗に昔しの間をクサスから、田中のエライ事、妾に役者を買ひ與へて其の氣を兼ねた粹な事などを語り、當世にはそんな人がありますかと、伊藤さんにあてつけて云うた事がある。其時に伊藤さんも困つたから、長州にも長井雅樂ヨシノブと云ふ人があるが、田中と一對だと、矢張り昔しの人を持出してヤツトの事にお茶を濁した、アハハハハ。

### 家康時代の外資輸入

徳川家康が眼病に悩んでいたく困却した時に公の眼の明暗は天下の休戚に關すると云ふので、朝野を擧げて心配をした。此時分、支那の亂を避けて日本へ逃げて來て長崎にゐた、支那紳士の中に眼科の名人があると云ふ事が江戸へ聞こえ、人をして招かした處が早速に江戸へ來り、家康も此人のお蔭でつぶれかゝつた眼が助かつたので非常に喜び、謝禮として少なからぬ黄金を與へた。すると此の眼科醫が辭して云ふには、身既に本國に居る能はず、貴國へ逃れ

て安穩に月日を送るを得るは全く大君の賜であるから、これしきの事に黄金などの賜を拜受すべき謂はれないのみならず、黄金は多分の貯へもあるから、決して頂戴におよばぬ。併し強ひて恩命を賜はるとあらば、あはれ尺寸の土を賜はりたい。不佞は貴國の主となりたいたい覺悟なれど、相成るべくは己が所有地に埋まりたい心願でござると申上げた處が、家康公には尤もなる願ひとあつて、直筆で長崎の出嶋二萬何千坪を賜はるの朱印を賜はつたので、此の眼科醫は喜ぶこと大かたならず、いそぎ長崎へ馳せ下り、これを奉行に示すと、大御所の直筆を拜見するのであるから、屋根の下にては恐れ入ると云ふので、大空の野原で拜見に及び、奉行は平伏した。これより出嶋は此支那人の有に歸したのである。さて此支那人は喜びの餘り、ありし事ども詳細に本國へ申送り、日本の本國に比して太平なること、一生を送るに愉快なること、今度頂戴した土地の廣くして避難者の居るに適することなどを吹聴に追ひだ處が、追ひく支那の富家豪紳が此の出島に来て難を避ける様になつた。此時この富豪の齎らし來つた金塊は、どの位あつたか分らんけれども、實に夥しいものであつて、出島を與へた爲めに思ひがけない非常な外資の輸入を招いたのである。即ち加藤清正が熊本城を築いたのも、福嶋正則其他當時續々

大土木を興して築城をやつたのも、其資本は何れも此の出島の豪紳より借り受けたので、日本の正金はこのとき餘程増加したと云ふ事である。これは餘り人の知らない話しであるが、故勝海舟翁が嘗て吞象翁に語つた事實であるさうな。

### 大名と大阪の金貸

大名に金を借りられた擧句、貸主の損となつたのは随分多いが、江戸と大阪を較べると江戸は大方貸倒れて、大阪の金持は幾んど倒されなかつたと云うてもよろしい。それは何故であるかと云ふと、流石に大阪は其の時分からなかく、コスク立廻つた故である。大阪の金持は借方たる大名に對して一種の同盟を形づくつた。そこで大名の方では秘して置くけれども、此の同盟中の金持には、誰れはどこに幾らの借りがあると云ふ事がチャンと知れて居るのだ。で大名より甲なる金持に内々少しばかりの金を貸して貰ひたいと申込むと、抵當は何、返済は何時、利子はいくらなど云うてお定まりの推し問答の末貸方より、時に御藩では誰れ某れより何萬圓のお借りがあるさうだが、ドウです、私方より金を差上げますから返済なさつて一纏めになさ

つては如何です。何だか他所にも御關係があると、私方でも面白くありませんなど吹つかけるのは皆同盟申合せの上の慣用手段で、先方より借金の申込を機として、他の貸方の負債の利子を清算せしむるのである。大名の方では此の内實を知らないから、深切有り難しと大抵はこれに乗るが例なれども、實際は貸方を利するのであつた。甲より金を出して乙に拂ふと云ふも、手形一本の働きで出来るのである。大阪の金持は斯る仕組で始終貸倒れを警戒したから、多くの損は無かつたのである。

### 三井倒産を免る

維新の當初政府は小野、島田、三井等に獎勵していろいろの事業をやらせた。一面には政府より金を預け、一面には事業を興すことを獎勵したから、つかひ込みの起るも無理は無いのである、然るに政府より突然預け金に相當する抵當を出せ、然らざれば預け金を戻せと云ふ様な筆法でやつて來たからたまらない。小野組の如きも、つまりこれが爲めに瓦解を來たした。三井の如きも、今少しの事で同轍を踏む處であつたのだが、幸にして三井は逸早く政府の内議を

聞いたから、急に抵當を作つた。當時横濱で一坪十錢位なヒドイ地面を買つて、宅地たくちで候、一坪十五圓で御座ると、縣廳から地券を申受けた。これを抵當に差入れたから助かつたのである。當時の縣廳などと云ふものは、高い地券を渡せば多く税が取れると云ふので、サツ／＼と地券を書いて下げたものであつた。

### 伊達家の硝石

慶藩後仙臺の伊達家から陸軍省へ引取つた硝石は實に莫大なもので、彈藥を製するに長い間之れを使つて間に合はせて居つた位だと云ふ。政宗は兵器彈藥に二萬石を充て、居つた位だから、これあるも無理はないが、支倉が羅馬から歸るのを待つて何かやる積りであつた事は、此の莫大な硝石を貯藏し置きし事でも分るぢやないか。

### 吞象とは何ぞ

翁の談話は滾々として盡きざる事河の如くで、尙ほ紹介すべき趣味ある今昔談も尠なくない

けれども、此れで閉筆する事にしよう。私が最後に高嶋翁に向ひ、君の號の吞象と云ふのはドウ云ふ據り處があるかと問ふと、ナニ「象を吞み込む」と云ふのだ、むづかしい出處なのあるわけがない、人が遂に吞象と云ふから、終にさうなつたのである。翁又曰く、全體私の姓は高嶋でなく、「薬師寺」と云ふのが本當の姓で、今でも水戸には此の姓が多い。處が商人の身分で薬師寺など云ふ姓では困ることがある、薬師寺と云ふ提燈を點けて歩くと、何だか醫者が歩く様な氣がするでせう、そこで屋號を高嶋屋と云うたから、遂に高嶋を本姓としたとの事であつた。

## 二一 光悦の遺蹟を訪ふ

近年本阿彌光悦の多方面に涉る藝術が、漸やく鑑賞家以外にも知れて、その遺蹟の存する京都鷹峰に筈を曳くものが多くなり、其遺蹟を保存する光悦會が組織され、光悦寺内には瀟洒な茶室や訪人の休憩所などが建てられ、草萊を拓いたり附近の土地を買ひ添へたりして、其遺蹟の保存につとめてゐる。

私が前年京都に滞在中、或る知人より光悦屋敷の細圖を贈られた。兼ねて漠然と想像を馳せてゐた私が、此圖を見て始めて手に取る如く、光悦の家や其親族の家などが分つて、其邊の光景が彷彿として眼に映するの感があつた。以前から光悦趣味を有つてゐた私は、茲に決然一游を思ひ立つたのである。私を案内した人は京都の年若い藝術家石本曉海氏で、此地をよく識つてゐる人であつた。

鷹峰は洛の北方に當り、紫野の大徳寺を過ぎ、更らに一里近くチリ／＼上りに上る高燥の地である。紫野邊より四方を眺めると展望如何にも廣く、山や野や林や田や人家は布置おもしろく、畫圖も及ばぬ風景に先づ心を酔はしめた。此日は空麗かに晴れて氣澄み、散策には此上のない好日和で、心も軽く次第に上り行くに、「是より光悦屋敷」と刻んだ石標に接した。一息入れて此邊の風景を探るに、先づ眼に入つたのは程近き二三の小山で、それが如何にもヌヅォー式であるのに、私は思はず「これだ／＼」と連呼し、車を駐めて一行を顧み、「此山こそ光悦の山だ、お互が光悦の作品に見る山はこれだ」と云うて、しばし夢心地になつた。

扨愈々光悦屋敷の地域内に入つて見ると、地圖で見た通り、なか／＼廣大な地區で、一ツ屋

敷と見るよりは一ツ村と見るべきものである。近年光悦會で立てた石標で光悦の宅址も他の重なる遺址も容易に知れたが、光悦の宅址は向つて右側に當り、中央より較々上の方である。今は何人が住んでゐるか、其の土塀は半ば崩れて、富める人の住居とも見えない。此の土塀の上から一本の松が表へ枝を出してゐたが、これも光悦時代の老松でなく、何等の風致も無かつた。しかし光悦の宅址を中心に、石標を辿り、いろ／＼の遺址を捜して見ると、爰は光悦の一族が住んでゐた計りでなく、光悦の藝術に關係ある、いろ／＼の技師や職工も爰に住み、又いろいろの設備もここに整つてゐたらしく思はれた。即ち刀劍であれ、蒔繪であれ、陶器であれ、製紙などに至るまで、皆それ／＼の職人が此の一廓内に置かれ、光悦の意匠のまゝにそれ等が手足の如く働らき、あれ丈の名品を出したものであらう。即ち此の一廓は藝術屋敷である。光悦が無冠王として中央に坐し、多くの匠人に君臨したのであると思ふと、追遠の感に堪へなかつた。此の一廓内に、光伯、光甫などの屋敷跡もあり、光悦の母妙秀の歸依した寺の址も存してゐた。畫家宗丹の屋敷跡はなきや、灰屋はひや紹益（佐野氏）の思ひもの遊女吉野が寄進した寺門は何れと、漁り廻はる内に、車は一寺院の門前に着した。

此寺が即ち光悦寺で、光悦會が保勝に力を入れてゐるのはこれである。車を下りて門に入ると、石だ、みの細徑があつて、左右には竹林が陰をなし、えも云はぬ幽趣を覺えた。寺僧に案内されて座敷に通ると、こゝは近年建てたらしく、古色はないが、縁近く光悦好くわえつこのみの老松が横臥の態をなしてゐるのがうれしかつた。寺僧は光悦手植の松だと説明したが、それは兎もあれ、慾には松の根元に幾株かの薄うすがほしかつた。光悦の繪には薄がつきものである。此松に配するに薄を以つてし、尙ほ銀色の明月が樹梢に懸つたら、それこそ光悦の繪そのまゝであらうと、種々想像を馳せた。

庭も近年光悦會で取擴けたものだと言ひ、一行はそろ／＼歩いて見ると、三四十歩して崖があり、雜然たる野草に埋められてあるけれども、おのづから一種の趣があつて、床しく思はれた。左方の小逕を辿つて行くと、光悦の墓があつた。墓面には「南無妙法蓮華經」の七字を刻したのみで、格別意匠を凝らして無かつたが、簡素の間に何となく光悦の面影がほの見えた。此墓に隣つて板倉公の墓が立つてゐた。光悦は公の知遇を得た緣故から、こゝに供養塔を建てたものか。尙ほ幾基かの墓を此邊に認めしたが、大概は光悦一族の墓であつた。其の刻字が磨滅

して讀めないのを遺憾とし、木標に小傳でも書いて墓側に立てたらよからうと思つた。ある墓碑の側らに苔むしたる自然石の洗水鉢があつた。如何にも古色掬すべきものがあり、茶人の垂涎すべきものと思つたが、果して大阪の藤田氏が欲しがり、掘らせて見たが、石の根が大きく深く土中に盤屈してゐるので、終に掘り上げ得なかつたと、案内の僧の話である。

庭内小高い丘陵の右手に、光悦會で建てた小亭がある。懸崖に臨んで如何にも形勝の地を占めてゐる。一行こゝに入つて憩ひ、肘掛窓を推して眺めると、前には光悦好の圓い山があり、崖下一圓は亂草で埋つてゐるが、其中を穿つて一帯の溪水が銀絲のごとく流れてゐる。これが又えも云はぬ風致があるので、川の名を問へば、光悦が紙を製したと傳へらるゝ紙屋川だと云ふ。此邊遠望殊によく、山と山の間より東山ひがしやま一帯の翠を望み、兩賀茂あたりの市街が指顧の間に見え、えも云はぬ好風景である。恐らく郊外から京都を觀望する景色でも、斯程に脱俗幽雅の趣ある處は他に無からうと思はれた。

折柄夕日が前山に映じ、光線の按排で山が皆鉛のやうな鈍白の色を呈したのを見て、私は思はず膝を拍つて「これだ！ 光悦が好んで其蒔繪細工に嵌入する鉛山なまりやまは即ちこれだ」と叫ん

だ。光悦の意匠は故らに困んで得たのではなく、日夕目前に見る山を其儘圖案に取り入れたのであることが、此處に来て見て合點が行つたのである。私は此等の山を鉛山と命じて悦に入つたが、一行も相和して鉛山を賞した。此邊自然の風趣を描寫する事は私の企て及ばない所である、已に林羅山の「鷹峰記」といふ有名な文もあり、殊に吾々の喩々を待たぬが、私はこゝに灰屋紹益の「にぎはひ草」から此地の風光に關する一節を引きたい。私の實見した氣分がそつくり紹益によつて寫されてゐる。

(前略) 都のいぬるに當りて、鷹が峰と云ふ山有り、其の麓を光悦に給りにけり。我が住所として一字を立て、茶所などしつらひ、都には未だ知らざる初雪の朝は、心面白ければ、寒さを忘れて自ら水汲み、釜しかけ、程なく煮え音つる、も、いと淋しく、都のかた打眺め、訪ひ來る人もがなと、松の梢の雪は、朝の風に吹き拂ひて、木の下かけにしばし残るを惜む。東は、賀茂の山、松が崎などは、いと近く、松と竹とのけぢめ見ゆる程にて、比叡の山は、此方の山より上に麓迄見えて、いと高く、一條寺の里、白川までも麓と見ゆ。雪の頃ならねど、有明の月は、頂の山の端に残りて、明方近き程に、遠方は霧深

く、麓の山は皆隠れて、比叡の山は、水海のあなたにや、と打眺めらる、よ。横雲棚曳き、出で、誰が別路の眺めなるらん、と老の心を慰む。京の方は、巽に當りて、いとめでたく、朝夕の煙り賑はし。都の空打越して、音羽山、稻荷山、深草山、伏見の里の空はるばると遠方に高山あり、春日山、三笠山にや、と推し量り眺めやる山々、四方に限り無くぞ見え渡る。斯かる住居の軒端の松に馴れて、年久しかりし世の中のわざとては一つも知らず、心にもなし。我は、然こそすべけれ、とこしらへたるは、更に無くて、生れ得たる心の潔きにてぞ有りける。

右は紹益の叙景の一節であるが、之れを讀むと、風景と關照して隱棲後の光悅の心境までも彷彿することが出来る。

此小亭に行厨をひらき酒を温めて、且つ飲み且つ談じて時の移るを知らなかつた。寺僧も席に來つて拙書を詣めるので、否み兼ねて惡筆を書畫帖に留め、寺僧の示すに任かせて光悅の木像、其遺墨、太虚庵の記などを一覽し、且つ此の亭の結構も一わたり見たが、如何にもよく工夫されてゐたのに感服した。窓には例の光悅くわがえつぎ障子が應用され、肘かけ窓に裝置した板縁に嵌めて、

ある板などは、皆光悦面を取つてゐる。何れ其道の人の數寄を凝らした工夫に成つたものらしく、遊い趣味である。若し閑にあかして其方此方見物したなら、此の境内には他にも種々の工夫を見出したらうが、此日はそんな詮索する閑はなかつた。

感興盡きず、光悦翁に倣つて此の幽境に隠居したいやうな氣もした。時刻の移る事早く、私の忙がしい身は長坐を許さないので割愛坐を起つて、歸り際に庭の邊りを歩いて見ると、其處に竹で面白く垣根した茶室があつた。中へ入つて見ると、是も光悦會で建てたもので、爐の切り方や、挽割の儘の材で作つた爐ぶちなど、趣致を覺えた。

歩を移して寺の本堂に至り、光悦の位牌を拜した。ふと見ると、堂内に古色蒼然たる刻板が一枚あつた。何か由緒あるらしく思はれたから、能く見ると、光悦一族の系譜とも見ゆるものが刻してある。寺僧の語るには、之は近年途縁の下に埋没してあつたのを拾ひ上げたので汚ないものだが、何かの記念にもと思つて保藏したと云ふ。記念どころでない、此の古板こそは偽りなき光悦一家の歴史を語るもので、此寺に取つては極めて重要なものだから、珍重保存すべしと注意した。寺僧は初めて悟つた様子で大に喜んだ。

京都へは従來十數回遊び、多くの名所を見たが、自然の趣味の豊かなるは光悦寺を第一に推さねばならぬと感じた。

## 二二 五色の旅

題して五色の旅といふと、何となく奇を弄ぶやうでもあるが、さうではない。およそ旅とし云へば、何色かの旅である、その觸る、所のもの皆何等かの色を有するからだ。海へ行けば白く、山へ行けば青い、土や樹や石や、川澤湖沼皆それぞれの色があるのみならず、人にも家にも風俗習慣にも亦色があつて、これを「ローカル・カラー」というてゐることは先刻御承知の通りである。されば旅の記は其の目に映じた種々の色を描くことであるとも云へる。或は如實に色彩を施して繪を描くこともあり、或は單に文を以つて色を寓することもある。藝術家の旅の記は色彩を用ゐた繪よりもはるかに寫實で、はるかに趣味がある、藝術家のエリア處がこゝに在るのだ。何れにしても旅は最も多般の色に接觸する機會である。私の旅にしても幾十百の色に觸れたのであるが、特に五色といふのは、五種の色に感ずる所があつたからである。

私が朝鮮に旅行したのは五六年前である。朝鮮で何物よりも深い感じに打たれたのは、例の白衣の風俗である。此の白衣は氣節を超越し、夏でも冬でも、多少の取除けはあるにしても幾んどあらゆる階級に通じて白衣を着けてゐる。この白衣は概ね麻で作られてゐる。麻は日本や西洋では贅澤品になつてゐて、シャツでもハンカチーフでも安價のものでない。日本の上布も勿論高い價のものである。それを鮮人が常服にしてゐるのを見ると、贅澤過ぎる感も起るが、實を云へば原始的の服裝である。あんな暖味のない強張つたものよりも綿服の方が着心地がよい、別して寒を防ぐには綿服がよいのに、鮮人は之れを以つて彼れに替へることをせぬほど頑固に舊習を守つてゐる。日本でも古くは麻を着物に用ゐた。で其麻を軟かにするために之れを撃ち和らげねばならなかつた。ふるい歌集に夥しく砧うすたの歌のあるのは此故であらう。然るに綿布が發明されて砧も不用に歸したが、朝鮮では今も昔しのごとく砧が入用である。鮮人は餘程潔癖性と見えて白衣の汚損をひどく厭ふ所から、其の妻妾の最も大切な任務と云へば、日々夜々之れを洗ひ淨め、之れを撃つて和らげるにある。鮮人の家庭の四六時忙がしいのは此故である。京城の鮮人市街鐘路に行つて見ると、滿卷白鷺が群がつかつてゐるやうに白衣の人が右往左

往、調歩横行して宛然白世界を現じてゐる。彼等が着けてゐる、些しのシミも垢もつかぬ清白の衣類を見ると小氣味よく感じられるけれども、靜かに彼等は何のため街路に往來してゐるのかと釋ねて見ると、何の用があるでもなく、唯だ漫歩散策してゐるのだと氣がつく。彼等の多くは公園を占領して惰眠を貪り、幾んど半日も遊んでゐる、その暢氣さには實に驚かされた。彼等鮮人には「ノラ・サラミ」といふ名がある、日本で遊惰のものを「ノラクラ」といふと同じく「ノラ・サラミ」は即ち遊惰の人といふのであらう、彼等はおめかしをして遊惰に耽つてゐるのである。此の遊惰の風を誘致した原因は一にして足るまいが、其の着する白衣も確かに遊惰の誘因をなしてゐると吾等は見て取つた。些しの汚損すら氣にかけるやうな潔癖のものが、日々おめかしをやつて、何しに働くことが出来ようか。勞働は少くとも衣服を犠牲とするものである、朝鮮の「ノラ・サラミ」に勞働を望むのは、社袴を着けたるものに快活の働きを望むと一般で、難きを責むるものではあるまいか。朝鮮の馬卒ですら、途中驟雨などに出遇ふと、客を閑却して己が戴く帽子や衣服を保護するに没頭する、其の笑止さは私が目撃した實況である。されば鮮人の行動に累を爲すものは白衣である、其家庭に累を爲すものも亦白衣であ

る。白衣を改めねば鮮人の或る階級の遊惰を改めることが出来ず、鮮人の家庭を洗濯の奴隷より救ひ上げて他の勞役に就かしめるの道も亦白衣を廢するより外は無いと感じた。

私は朝鮮を去つて北京に行く途中鴨綠江の鐵橋を横斷した。前岸は支那の領土である。茲で先づ氣の付いたのは、多くの農民が田圃を耕してゐる光景であつた。彼等は皆青色の筒袖と股引を着けてゐる、白衣の天地はこゝに青衣の天地と變じた。支那の黎民を蒼生といふのも偶然でないと感じた。彼等は身輕に汗を流して働いてゐる。彼等は汚穢といふものを全く知らざる如く、泥濘にまみれ、糞土に親んでゐる。私はこれを見て叫んだ、働くには此色此服で無ければならぬ、朝鮮遊惰の白衣連、何ぞ近く隣境に來つて此光景を見、自から改むることをせざると。私は一葦帶水を隔て、蒼衣の風俗を見て坐ろに痛快を覺えた。汽車中偶々一客あり、私に日米の近事を語つていふのに、米人の日人排斥運動もひどく濃厚となつて來た、少數の米國の識者は之れを憂ひ、日本人を驅逐するのは取りも直さず日本人で無ければ産し得ない野菜類を絶つ所以で、折角蒼々となつた田圃を、もとの白土に歸するのは眞に愚の骨頂とし、田圃の各所に「白土たらしむる莫かれ」の標札を立てるに至つたと、其記事のある外字新聞を示された。

私は之れに答へていふのに、米人の所謂る白土とは支那の所謂る赤土で、赤土は不毛の地をいふのである。恰かも身に一絲を着けざるを赤裸と云ふが如し。赤露が赤を以つて旗色とするのも虚無の意を寓するのであらう。虚無は即ち不毛である、これが亡國の徴である。因つて私は朝鮮に目睹したる事實を語つた。それは白衣でなく山嶽であつた。朝鮮の山々は皆山骨を露はして土が無いから木も草もない。朝鮮の諸山は皆赤化したのを、合邦以來皇化漸やく露ひ、諸山今や微翠を呈し、追々積翠の昔に還らんとしてゐる。諸山の赤化は亡國を語るものでなくて何であらうか。白土や赤土は、畢竟國土を不毛ならしむる所以であることは誠に米國識者の言ふ所の如しと。此談話は端なく私の旅に一色を加へた。

汽車は漠々たる廣原を走つて翌日夜に入り北京に着し、北京飯店に宿することとなつた。翌朝ペランダに出て驚いたのは、支那の皇宮紫金城が眼下に見えることであつた。これは想像したよりも大規模のもので、幾んど見渡す限りが宮城區域で、城内には市街もある、皇室の専用である黄紫二色の屋瓦で作られた臺が、青空を凌いでゐる壯觀は、眞に魂飛び魄迷ふの概があつた。此日恰かも晴天で、朝暉の屋瓦に映する光彩は燦爛として眼を眩し、心膽を驚かした。

其の大規模の壯麗はとても寫し得ないが、五日間北京に滞在し、早朝から夜に入るまで自動車で乗り廻はり、日々の觀光終に皇宮區域を出ることが出来なかつたと云つたら規模の大略を髣髴し得るであらうが、世界に皇居王城はいくらもあるが、これほど大なるものは斷じて他に無からう。清帝が國を中華と呼んで四海に君臨するの態度を取つた、その抱負からすれば、其の皇城の規模も斯くあらねばならぬと感じた。若し支那人が黄色人を代表することとならば、これも亦代表の禁闕たるに恥ぢぬ。此の皇居の屋上に輝やく黄瓦を見るだけでも、獨帝をして黄禍を云はしむるものがあるとシミ／＼と感じた。しかし同時に感じたのは、これほどの大土木は偶々民力を糜して支那を疲弊に導き、清朝は廢せられ、中華民國は常に動搖の内にある、黄禍として恐るべきは最早や此の皇城でもなく又國民でもないと歎息した。そして私しの感慨を一層痛切にしたのは、西太后が幾百萬圓の海軍資金を轉用して萬壽山の離宮を築いたことである。私はその經營の壯大を見て坐ろに感慨に堪へなかつた。若し支那が西太后時代に早く覺醒し、萬壽山を經營せずに多くの軍器軍艦を作つたとしたら、日本も或は枕を高うすることが出来なかつたかも知れない。諸外國とても亦同様であらう。然るに衰亡の運命は如何ともするこ

とが出来ず、唯だ黄紫の殿瓦が燦然舊時の盛を物語るのみであることを思ふと、誰れか支那の爲め一滴の涙無からんやである。

支那漫遊中には漠々たる沙漠も見た、高粱の波濤のごとく際涯を知らないのも見た、一端ながら黄河も見た、大豆肥料の埠頭を埋むるのも見た、そして萬丈の黄塵は一刻も身邊を離れなかつた、此等のものは皆な黄色である、支那の旅は何というても黄ろい旅であると感じた。私は天津、濟南を廻はり、青島より歸途に就いたが、船中本國を遠望するに及んで快哉を叫ぶことを禁じ得無かつた。三十日の旅行は確確なる朝鮮の山に飽き、漠々たる支那の平原にも飽いた、而して本國近く一抹の翠黛を天半に望んだ時は、三十日間曾つて體驗しない生色に觸れた氣がした。私は日本の山水に熟してはゐるが、國外から見たのは此時が初めてである。外部から見ると、日本全島の積翠は生氣があつて、得も云はぬ霏ひがある、三十日間どこにも見ることの出来ない色はこれであつた。私は叫んだ、吾等の國土は何故こんなに立派であらう、神僊の住むてふ蓬萊もこれには及ぶまい、赤魔襲來、邦人之れに魅せられ、或ひは其の手足となつて立働くものがあるが、我が祖宗の國土を赤化不毛に歸して堪るものかと。快哉滿を引いて無

事歸國を自祝した。曰く白、曰く蒼、曰く紫、曰く黄、曰く赤、三十日間の紀程、特に記憶に存するものは此の五色である、依つて五色の旅といふ。

### 一三三 修善寺の鐘聲

曾て修善寺温泉に遊んだことがあるが、この温泉で氣に入つたものは朝夕響きを傳へる梵鐘の聲であつた。それが餘りによく耳に徹するので散歩の序に距離を計つて見ると、寺（修善寺）は恰も旅宿の隣家で、鐘樓は殊に宿に近いところにある。裏口から出て見ると、僅に十歩ばかりで直ぐ鐘樓に達することが出来る。こんな近くては鐘下に起臥してゐるも同様で、近く響いたのも當然であつた。元來鐘聲は近く聴くよりも遠く聴くほうが趣がある。しかし終日事に倦んだ時に聞く晩鐘などは、響きの烈しいほど惰氣を一掃するの概がある。又朝の五時頃に撞き出す鐘が響いて來ると、どうしても平然として寢てはゐられぬ。

この禪刹には四時半に讀經するのが例だといふから、鐘もその折に撞くと見える。近いから撞くところを出て見ると、有髪の者が撞いてゐる。鐘樓の一隅には椅子が一脚備へてあるが、

一つ撞いて次に撞くまでは、この男椅子に凭つて雜誌などを讀んでゐるのを認めた。今では眞面目に勤行の一つとして僧自らが撞く譯ではないらしい。此鐘は一體何時代に鑄造したものであらうか。ツイ銘なども檢せず終つたが、しばらく回祿の災に罹つてゐるから、鎌倉時代の鐘かどうか、一見したところではそれほど古色は認め兼ねた。併し音響で考へると、なかなかよい鐘である。自分はこの鐘聲を聞く毎に、種々なる史的聯想を禁じ得なかつた。

よし又この鐘が鎌倉時代のものでないにしても、その時分から同じ場所に鐘はあつたに相違ない。この寺の開山といはれてゐる、臨濟りんぜいの名僧蘭溪禪師は、宋からやつて來て、この邊の景色が本國の廬山に似てゐるというて、寺を肖廬山、前溪を虎溪と呼んだと傳へてゐるが、禪師もまたこの鐘を聞く毎に、遠く故郷に想ひを馳せたことであらう。名僧寧一山も、一たびはここに住した。自分は鐘聲を耳にして、深く畏敬する、この僧のことが一層聯想されるのである。この地に謫せられた源家二代の頼家は、朝夕この鐘を聞いて如何に感じたことであらうか。榮枯盛衰は常理といひながら、彼が如き悲惨な運命は臨濟の教によつて果して慰め得られただであらうか。尼將軍政子も、流石にその長子の悲運を閑却しかねて、徹行してこの溪村をし

ばしば訪うたといふが、政子また且暮の鐘聲に、抑へ切れぬ憂愁を味ひはしなかつたであらうか。いくら實家本位のこの尼でも、一身の罪業深きを思うては、恐らく戰慄を禁じ得なかつたであらう。星霜は幾百回代謝しても鐘の聲は絶えず響く。寺は焼けてすでに幾度も模様が変わり、人家も著しく變遷してゐる。樹木なども最早舊時のものではないが、たゞ鐘だけは、たとひそのものは往時のそれでないとしても、五六百年間朝夕撞くことに變りはない。自分の今聽く聲こそは、蘭溪や一山や頼家や政子が聽いた聲である。自分は鐘聲を耳にしてこれらの人々を思ふと、もに、此人たちの境遇や性格までもいつしか幻想に描き出すのであつた。

修善寺で今も昔と變らぬものは寺前にある一帯の溪流であるが、鐘聲は水に落ちて間斷なく流れて行く。五百年前の鐘聲を聽いたものは、たゞこの溪流だけであらう。しかしそれも刻去つて、往事茫茫、今は空しく想像の翼を張るの外はない。

## 二四 幼時の風遊び

私の幼少の頃は風かぜの流行時代であつた。私は遊戯に格別趣味を有たなかつたが、風揚丈は大

好きであつた。當時男性的の遊戯と云へば先づ凧を飛ばすことで、まだ其頃は今のやうな野球などの遊びはなかつた。今日飛行機が實用に供され、小兒と雖も之れに興味を有ち、専門の能力のないものまでが、飛行機の新案を試みたりするなども、長い間風俗をなしてゐた凧遊びから、脈を引いてゐるものではなからうか。

凧は端午の節の遊戯であるけれども、端午の前後幾十日とつき、小兒が弄ぶばかりでなく、大人までも弄び、單に空に飛揚して喜んだ計りでなく、他の凧と闘ふ事が起つた。其のために糸に種々な工夫をすることが行はれ、遊にひたして固めたり、硝子の粉を塗りつけたり、或は剃刀を結びつけたり、方言「サンマタ」と呼ぶ个字形の刃物をつけたりして武装する事が行はれた。兩々互ひに約してカラメ合をすることもあり、或は不意に奇襲を試みることもあつた。通例は個人々々のカラメ合であるが、一町と隣町、一村と他村の戦争となることもある。個人々々のカラメ合の結果、負けた方から常に苦情を生じ、口論が始まると、それが動機で人氣が立ち、喧嘩氣分で、町と町、村と村が争ふことになる。さうなると壯丁は總動員といふ騒ぎで、おのが町村の榮辱は係つてこれにあると云うて非常な敵愾心を起し、幾十の凧が双方

から揚り、敵味方入亂れて相依り相攀ち、カランで兩つながら墜ちるもあり、刃物に糸を斷たれて飛ぶもあり、空中は大混雜を極めるが、痛快の味も亦此の時にある。此の遊戯は太平無事の天地に一種の戰爭氣分を現はすもので、頗る人氣を引立てる所に男性的遊戯の特徴がある。

戰鬪に用ゐる凧は輕快に操縱の出来るものでなければならぬ所から、多く小形のものを用ゐる。十六枚張りといふ位が尤もふさはしく、其形は六角であるべきは言ふまでもない。長方形の隅切らずは、戰鬪用にならぬ。これは唯だ飛ばして遊ぶ方のものに屬する。これには鯨で作つた方言「ウナリ」を上頭につけるのが通例である。天高く飛揚して一種の聲を發するのも愉快なものだ。六角型にも「ウナリ」を用ゐるが、戰鬪の場合には操縱に不便であるから、用ゐないことが通規となつてゐた。

私の郷里越後で凧で有名であつたのは中蒲原郡の白根村で、中の口川を挟んで前岸の村と雄を決するのが或る時代の年中行事で、吾が郷土の壯觀の内に數へられた。毎年此季節には近郷からも多くの見物人が集がり、兩岸は人を以つて埋まるの盛況を呈した。勿論此の戦は兩村の壯丁を擧げて村の榮辱を繋けて争ふのであるから、痛快のものであつた。随つて兩村とも凧

の操縦には最も妙を得てをると云はれた。

私の生れた北蒲原郡の水原（まき）と云ふ所は、今こそ寂莫たる所となつたが、もとは天領で陣屋もあり、殊に國內屈指の富豪が多くこゝに住したので、凧揚の遊戯も爰に發達した。昔しは百枚張の凧を有たねば富豪の面目を害すとさへ云はれた。私の郷里には富豪が多かつた丈に此大規模の凧を有する家が他郷よりも多かつた。私の家なども之れを有つてゐるが、百枚となると如何にも大きな物である。奉書大の大谷内（おほやち）といふ堅硬の紙百枚を張るのであるから、美濃紙百枚よりも一倍も大きい。此の百枚張は六角形を例とし、其の心棒とする竹の直径は三寸もあり、糸は直径七分もある太繩で、飛揚する時には操縦に二十人位の壯丁を要し、轆轤を用ゐて上下するのである。

右のやうな大きな凧は滅多に揚げらるべきでなく、所持して居るといふが富豪の誇りであるが、私の幼少時代に唯だ一回揚げたことがあつた。今考へて見ても不思議のやうに思ふが、アノ狭い町によくも揚げたものだ。果して揚げはあけたが、引きおろす時に、誤つて或る藥種屋の屋上に落ち、屋瓦をメチャクに破つたので散々苦情を持込まれた。今なれば、勿論交通整

理の爲め、市中に斯る大風を揚げることは許さるべきでない。

私の郷里は、大風があるので名高かつた外に、風の製産地としても名聲があつた。町に一軒の風屋があつて、それを謹名して一六というた。店頭に十疊程の板の間があつて、そこに二十六七の婦人が常に風繪を畫いてゐた。其の風繪は皆武張つたもので、義經、辨慶、清正、金平きんぺいなどが最も得意で、彩色も立派に施され、武具も凡そ式に適つてゐた。若い婦人の手でよくもあんな剛健な筆を揮へたものと、時に思ひ出すこともある。國內に風を製した所は多くあつたが、繪は決して此の一六に及ぶものは無かつた。殊にこの家で製したものは三十枚ほどの大きなものが多かつたので、其製品は頗る振つてゐた。私は幼少の頃此家から多く風を買つたが、毎日足を運んで食事時に歸るのを忘れた位であつたのは、購ふ爲めと云ふよりも寧ろ風繪の揮毫を見るためであつた。